

吉岡下ノ段遺跡第16次

発掘調査報告書

2021年

掛川市

吉岡下ノ段遺跡第16次

発掘調査報告書

2021年

掛川市

例 言

- 1 本書は平成30年度に現地調査を実施し、令和元年度及び令和2年度に整理調査を行った、吉岡下ノ段遺跡第16次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は茶園の改植に伴う緊急調査で、国及び静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は掛川市教育委員会が主体となって、同社会教育課 長井郁織が担当した。
- 4 発掘調査にあたっては、地権者・耕作者の方々から埋蔵文化財に対する多大なるご理解とご協力を頂いた。
- 5 発掘作業及び報告書作成にあたっては、以下の方々の参加を得た。(五十音順、敬称略)
太田敏子、小笠原国重、早乙女のぞみ、清水欽次、榛葉豊子、鈴木良晴、竹田徳子、寺沢巧、徳川浩、野中きみ子、藤田弘、藤田房幸、藤田理恵、松浦良和、溝口玉緒、村松信夫、山崎富士男、山崎麻由美
- 6 現地調査並びに報告書作成にあたっては、以下の方々からご教示、ご協力を頂いた。
(五十音順、敬称略)
足立順司、木村弘之、鈴木敏則、塚本和弘、平野吾郎、松井一明、松本一男、溝口彰啓
- 7 現地調査写真は、6×7mmブローニーモノクロフィルムカメラ、35mmカラーネガフィルムカメラ及び35mmカラーポジフィルムカメラの3台と、デジタル一眼レフカメラ(センサーサイズAPS-C)を併用した。遺物写真は、デジタル一眼レフカメラ(センサーサイズAPS-C)を使用した。
- 8 空中写真撮影は、掛川市教育委員会の委託を受けた株式会社フジヤマが行った。
- 9 自然科学分析は、掛川市教育委員会の委託を受けた株式会社パリノサーヴェイが行った。
- 10 本書は、InkscapeとGimpによるデジタル編集を行った。
- 11 本書の執筆並びに編集は、掛川市役所の長井郁織と戸塚和美が行った。
- 12 調査によって得た資料は、すべて掛川市文化・スポーツ振興課が保管している。

凡 例

- 1 本書で使用したレベル数値は海拔絶対高で、基準方位は座標北(G.N)である。使用した座標数値は、国家座標(世界測地系)に基づいている。
- 2 本書で使用した遺構表記は、以下の意味である。
SB：竪穴住居跡 SH：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構 SX：性格不明遺構 SP：小穴
- 3 本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
- 4 本書で使用した柱間寸法は、柱穴中心間の距離である。
- 5 本書の図中で用いたスクリーン等を使い分けについては、以下のとおりである。
：炭化物 ：石・石製品 ：貼り床 ：焼土

目次

例言 凡例

I	はじめに	1
1	調査にいたる背景	1
2	遺跡をめぐる環境	1
(1)	地理的環境	1
(2)	歴史的環境	2
II	調査に至る経緯と調査の目的	7
III	調査の方法と経過	7
IV	調査の内容	7
1	遺構	7
(1)	竪穴住居跡	7
(2)	掘立柱建物跡	9
(3)	性格不明遺構	9
(4)	その他	10
(5)	周溝を伴う中世墓	10
2	遺物	11
(1)	縄文土器	11
(2)	弥生土器・土師器	12
(3)	カワラケ	14
(4)	石塔	14
(5)	石器	14
V	まとめ	15
1	縄文土器について	15
2	弥生時代～古墳時代の遺物・遺構について	15
3	周溝を伴う中世墓について	16
VI	自然科学分析結果	18
1	分析方法	18
(1)	樹種同定	18
(2)	放射性炭素年代測定	18
2	結果	19
(1)	樹種同定	19
(2)	放射性炭素年代測定	19
3	考察	20

挿 図 目 次

第1図	吉岡下ノ段遺跡周辺地形図	4
第2図	グリッド配置図・遺構全体図	5
第3図	SB01実測図（1）	23
第4図	SB01実測図（2）	24
第5図	SB02実測図（1）	25
第6図	SB02実測図（2）、SB03・04実測図	26
第7図	SH01・SH02実測図	27
第8図	SH03・SX01実測図	28
第9図	SX02・SP19・SP60実測図	29
第10図	SD01実測図（1）	30
第11図	SD01実測図（2）	31
第12図	出土遺物実測図（1）	32
第13図	出土遺物実測図（2）	33
第14図	出土遺物実測図（3）	34
第15図	出土遺物実測図（4）	35
第16図	出土遺物実測図（5）	36

図版目次

- カラー図版1 調査区遠景（南から）
調査区遠景（北西から）
- カラー図版2 南側調査区全景
北側調査区全景
- 図版1 SB01出土状況（北から）
SB01・SB03完掘状況（北から）
- 図版2 SB02出土状況（西から）
SB02完掘状況（西から）
- 図版3 SB04完掘状況（西から）
SH01完掘状況（北から）
- 図版4 SH02完掘状況（北から）
SH03完掘状況（西から）
- 図版5 SX01出土状況（西から）
SX02完掘状況（東から）
- 図版6 SD01完掘状況（南から）
SB01土器出土状況（南から）
- 図版7 SB01土器出土状況（北東から）
SB01焼土検出状況（北から）
SB02土器出土状況（南から）
- 図版8 SB02硬化面検出状況（西から）
SP60カワラケ出土状況（東から）
SD01一石五輪塔出土状況（南から）
- 図版9 出土遺物（1）
- 図版10 出土遺物（2）
- 図版11 出土遺物（3）
- 図版12 出土遺物（4）
- 図版13 出土遺物（5）
- 図版14 炭化材

I はじめに

1 調査にいたる背景

静岡県の中西部は、全国有数の緑茶生産地としてつとに著名である。その要因としては、当該地域の温暖湿潤な気候と自然環境が緑茶生産に適していることがあげられ、くわえてより付加価値をもつ要因として、当該地の緑茶生産において特有の伝統的農法が近年注目を集めている。この伝統的農法は、「茶草場農法」と呼ばれ、世界的にも重要な地域かつ農法として認知され、2013年「静岡の伝統的な茶草場農法」として世界重要農業遺産システムに認定された。

茶草場農法とは、秋から冬にかけて茶園周辺の採草地である「茶草場」で刈り取った草を茶樹の根元や畝間に敷く伝統的農法で、その歴史は150年余に及ぶとされる。その農法により緑茶としての風味と香りが良くなるばかりでなく、農薬等に頼らない自然循環に依拠した農法であり、その結果、多様性かつ希少性の高い動植物の持続的生存が維持されている。

県中西部域のなかでも掛川市は、茶処として全国有数の生産量を誇っており、市内でも和田岡地区には二級河川原野谷川が形成した河岸段丘上に広大な茶園が展開している。和田岡地区においても茶草場農法が続けられ、自然環境を維持した良質な緑茶が生産されている。

広大な茶園が展開する和田岡地区の段丘上には、縄文時代早期から始まり古代、中世、近世に至る遺跡が数多く遺されおり、とりわけ弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落遺跡が広範に分布、場所によっては濃密に展開する。そのため、茶園の下はほとんどが遺跡であり、幸いにもこれまで茶園により遺跡が保護されてきたと言っても過言ではない。緑茶生産においてより良質かつ生産性向上を図るため伝統的な農法の継続とともに、茶樹の老朽化への対応ならびに生産性の高い優良な品種への植え替えのため、茶樹の経済的寿命を勘案して約30年ごとの改植が必要となる。改植は天地返しとも呼ばれ、老朽化した茶樹の撤去とともに、土壌の柔軟性保持と水はけを良くする目的で地中深く地山まで掘り返すため、遺跡の破壊が避けられない場合が多い。

掛川市では、改植により遺跡破壊が避けられなくなった場合の措置として、文化財保護法に則り記録保存を目的とした発掘調査が実施されている。今回調査対象となった地点においても、茶生産農家から茶樹の改植計画を受け協議、確認調査を経て本発掘調査に至ったものである。

2 遺跡をめぐる環境

(1) 地理的環境

掛川市は静岡県の中西部に位置し、その市域として北には赤石山脈から連なる丘陵の最南端に位置する標高832mの八高山を擁し、田園風景豊かな平野部を経て中央には古大井川の扇状地の隆起により形成された小笠山丘陵をはさみ、南には太平洋に面した海浜遠州灘が展開、山から海に至る恵まれた自然環境の中にある。

今回発掘調査が実施された吉岡下ノ段遺跡は、市の北西、袋井市と隣接する和田岡地区に所在する。八高山を源流とする原野谷川は、上流域では蛇行を繰り返しながら北東から南西へと流れ、流域では小規模な河岸段丘や開析谷が形成される。中流域では流路を南に変え、和田岡地区に至ると西岸に和田岡原と呼ばれる東西約1.2km、南北約2.2km、標高40～60m、比高差20～40mを測る河岸段丘が形成される。また、和田岡原の南東には南北約2km、東西約1kmの岡津原と呼ばれるは独立段丘を呈し、かつては原野谷川がこの段丘の東側を流れていた。

吉岡下ノ段遺跡が位置する和田岡原段丘は、標高60m前後の吉岡原と呼ばれる上位段丘と、標高40～50m前後の高田原と呼ばれる下位段丘に分けられる。吉岡下ノ段遺跡は上位段丘の吉岡原の東辺に位置し、標高50～55m程を測る南東方向に緩やかに傾斜する地形である。段丘の東眼下には原野谷川の流れとともに田園地帯を擁す沖積平野が望め、西に目を移せば広大な茶園が展開する。今回の調査地点は、吉岡下ノ段遺跡のほぼ中央に位置する。

(2) 歴史的環境 (第1図)

これまで吉岡下ノ段遺跡をはじめとする和田岡原で実施された発掘調査報告書において、それぞれの成果を基に和田岡原での歴史的環境が概観されている。そのため、屋上屋を架すことを避ける意味でもここではこれまでに実施されてきた吉岡下ノ段遺跡内での調査成果を中心に、歴史的環境について言及してみたい。

吉岡下ノ段遺跡では、これまでに本発掘調査だけでなく確認調査を含め16次にわたる発掘調査が実施されている。これまでの16次調査の内、本発掘調査は6次調査(2006年調査)、11次調査(2014年調査)、12次調査(2014年調査)、14次調査(2017年調査)の4調査である。

6次調査(2006年調査)は、段丘東縁辺に近い部分が調査された。調査面積は90㎡程であったが、弥生時代後期の方形周溝墓の角部が検出されており、竪穴住居跡等の居住を示す遺構が検出されていないことから、周辺域が方形周溝墓による墓域であったと考えられる。

11次調査(2014年調査)は、6次調査地点とは距離的に離れるものの同じく段丘東縁辺に位置する。縄文時代早期に比定される押型土器片が出土している。吉岡原での出土事例は未だ少なく希少な遺物であるが、吉岡原での人跡の端緒となる遺物と捉えてよかろう。縄文時代に比定される遺構は検出されなかったが、中期の土器片も出土しており、当該期の集落の存在が示唆される。遺構ならびに遺物としてのまとまりをみせる弥生時代後期から古墳時代中期にかけての竪穴住居跡は、平面形が明確なもの他、炉跡や床面の残存状況から竪穴住居跡と想定されるものを含めると20軒程が検出されている。重複関係の中での遺構の認識には問題もあるが、古墳時代前期から中期にかけての遺物は比較的充実しており、吉岡原での当該期の土器編年を検討する上では看過できない資料と言える。また、段丘縁辺に位置するため段丘中央並びに内部に比べ遺構が粗になることから、往時の土地利用を考える上でも興味深い。

12次調査(2014年調査)は、段丘内部の調査である。同時期と想定される古墳時代前期の竪穴住居跡2軒と掘立柱建物跡1棟が検出されている。これらは住居2棟と小型倉庫1棟から成る、1家族が所有するいわゆる単位建物群と想定されている。弥生時代後期の土器片も認められるが、他の遺跡に見られる著しい重複はないため、長期にわたっての集住とは認められず往時の集落動態を考える上での好資料と言える。

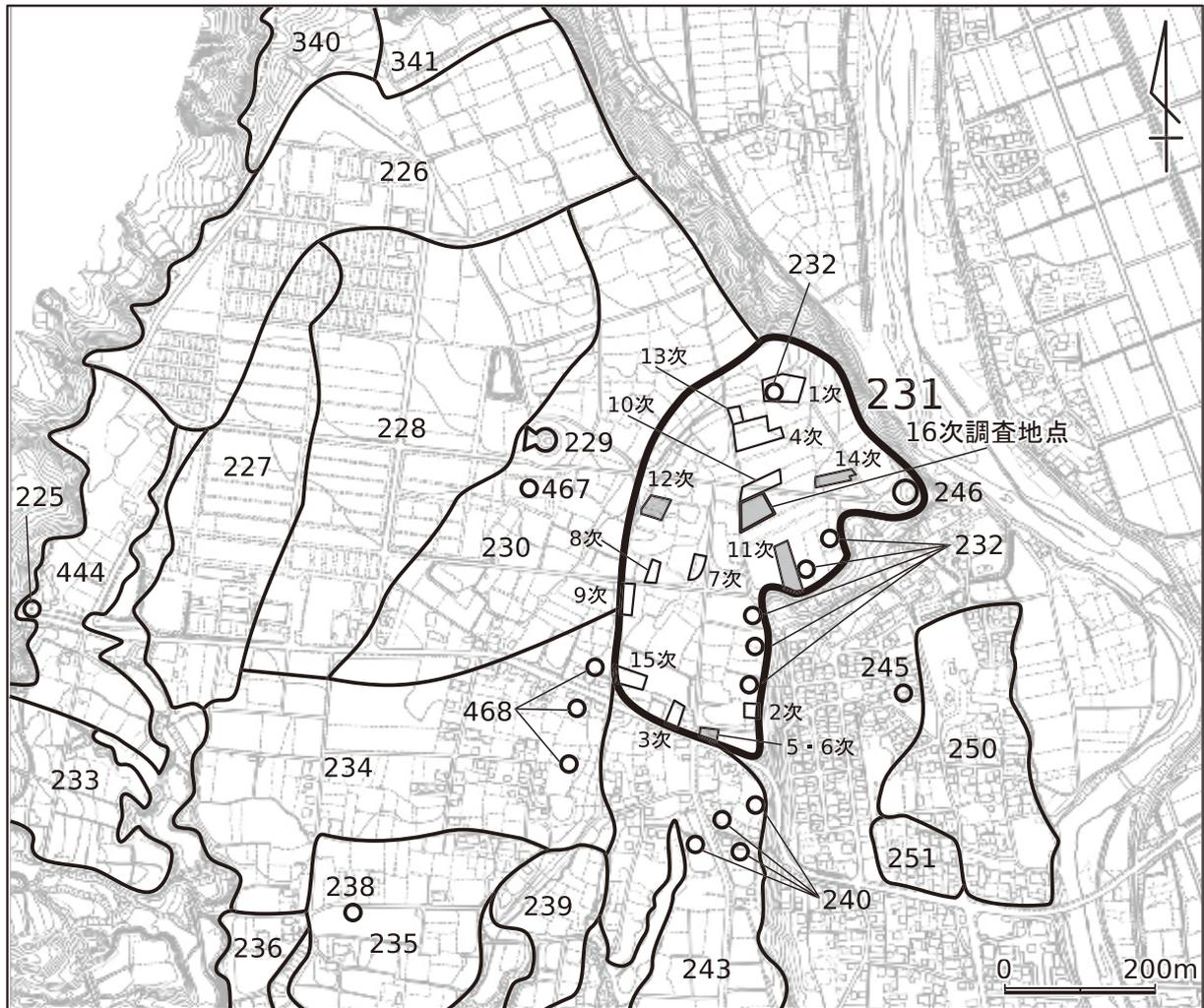
14次調査(2017年調査)は、丘陵縁辺からやや内部での調査である。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡2棟が検出されている。12次調査同様、著しい重複は見られない。14次調査の特筆すべき成果は、縄文時代中期の遺物を伴った住居跡と思しき遺構が検出されたことと、縄文時代中期末葉から後期初頭にかけての静岡県中西部(牧之原台地)から愛知県南東部にかけ分布する土器群の特徴を有した資料が比較的まとまって出土しており、当該地域での土器編年を考える上でも良好な資料が提示されたと言える。

上記の本発掘調査以外確認調査について、遺物は検出されるものの遺構が検出されないかもしくは既に著しい攪乱を受けている箇所もあり、遺跡全体での調査面積の多寡をみた場合も決して広いも

のとは言えない。したがって、未だ吉岡下ノ段遺跡としての明瞭な特徴に言及できる段階にはないが、あえて現段階で特徴に言及するならば、吉岡原に展開する他の遺跡同様、時代的に遺跡としての隆盛がみられる弥生時代後期から古墳時代前期にかけての一定の集落展開の中で、居住区域と墓域の土地利用の峻別が見て取れそうである。また、相対的に段丘内部に比し段丘縁辺部の方が遺構の密度が密となる傾向も読み取れる。このようにこれまでの調査成果の蓄積により、時代毎の土器編年や集落動態ならびに土地利用を考える上で一定の分析が可能な段階になりつつある。

参考文献

- 掛川市教育委員会 2008 『市内遺跡発掘調査報告書 高田遺跡第17・19・20次調査、吉岡原遺跡第6・7次調査、女高I遺跡第10・11次調査、吉岡下ノ段遺跡第6次調査』
- 掛川市教育委員会 2017 『吉岡下ノ段遺跡第11・12次 発掘調査報告書』
- 掛川市教育委員会 2019 『吉岡下ノ段遺跡第14次・吉岡原遺跡第14次 発掘調査報告書』



吉岡下ノ段遺跡・周辺遺跡地名表

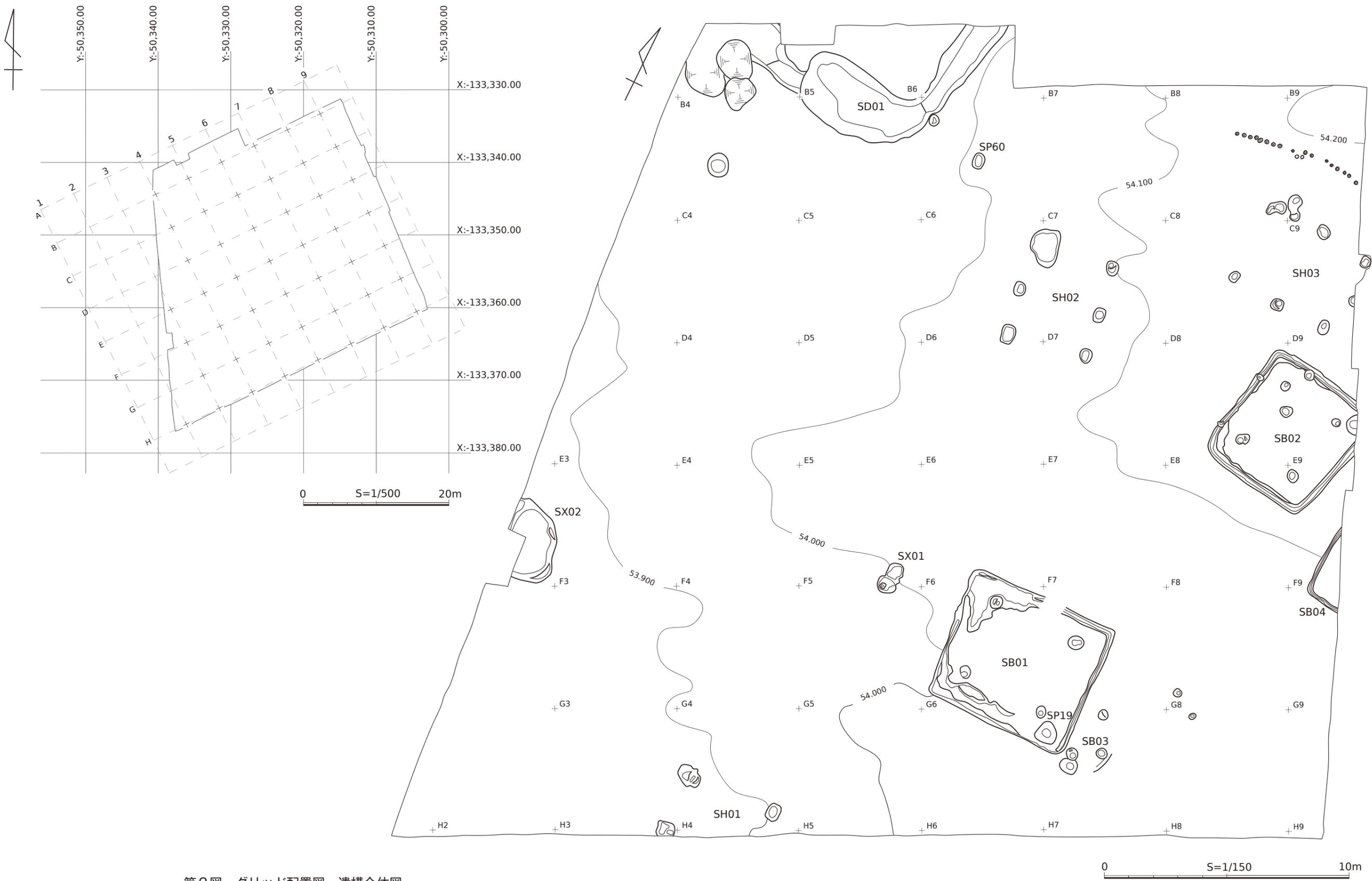
遺跡番号	遺跡名	遺跡番号	遺跡名
225	今坂遺跡	238	瀬戸山古墳
226	東原遺跡	239	花ノ腰遺跡
227	溝ノ口遺跡	240	藤六古墳群
228	中原遺跡	243	高田遺跡
229	吉岡大塚古墳	245	宮脇行人塚古墳
230	吉岡上ノ段遺跡	246	春林院古墳
231	吉岡下ノ段遺跡	250	林遺跡
232	吉岡下ノ段古墳群	251	西村遺跡
233	大向遺跡	340	西山城
234	吉岡原遺跡	341	城ノ腰遺跡
235	瀬戸山I遺跡	444	今坂遺跡
236	瀬戸山II遺跡	468	高田上ノ段古墳

※遺跡番号と遺跡名は、『掛川市遺跡地名表』による

吉岡下ノ遺跡調査履歴表

数次	調査年	確認調査・本調査
1	2005	確認調査
2	2005	確認調査
3	2005	確認調査
4	2005	確認調査
5	2006	確認調査
6	2006	本調査
7	2008	確認調査
8	2010	確認調査
9	2010	確認調査
10	2011	確認調査
11	2014	本調査
12	2014	本調査
13	2014	確認調査
14	2016	本調査
15	2017	確認調査
16	2018	本調査

第1図 吉岡下ノ段遺跡周辺地形図



第2図 グリッド配置図・遺構全体図

Ⅱ 調査に至る経緯と調査の目的

平成29年度に掛川市吉岡1480-2及び1480-3にて茶園改植の計画があることを把握し、平成29年11月20日～21日に確認調査を実施した。調査の結果、地表下約40～60cmから竪穴住居跡等の遺構及び遺物を検出し、茶園改植対象地に埋蔵文化財が包蔵されていることが確認された。確認調査の結果を基に耕作者と協議を行った結果、保護層を確保した上で茶園改植を行うことは困難であるとの結論に達し、記録保存のための本発掘調査を実施することとなった。

耕作者より平成30年7月5日、静岡県教育委員会あてに「埋蔵文化財発掘の届出書」が提出されたため、市教育委員会では記録保存のための本発掘調査が適当との副申をつけ、これを進達した。

これに対し、平成30年7月13日に静岡県教育委員会から耕作者あてに、本発掘調査の実施を旨とする「土木工事等のための発掘に係わる指示について」が通知された。

Ⅲ 調査の方法と経過

調査は、対象地の地形に合わせ5m方眼のグリッドを設定し、遺物の取り上げ及び実測の基準とした。グリッドは南北方向をアルファベットの昇順、東西方向を数字の昇順で表し、交点をA1区、A2区等と呼称し、北西に位置する杭にグリッドを代表させた。

現場での図面作製は遺構図を20分の1、微細図を10分の1とした。

調査は廃土置き場確保の必要性から調査区を2分割し、平成30年7月17日から南半面の掘削を開始した。10月3日から北半面の掘削を開始し、11月27日に現地調査を終了した。

検出した遺構の状況を記録するために、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査地点を座標で記録するために基準点測量を実施した。

Ⅳ 調査の内容

調査区は、前述のとおり明治時代から茶園が営まれてきた地域であり、過去の開墾、耕作による攪乱により包含層の残存はわずかであった。特に南側調査区では顕著で、攪乱は一部で遺構掘り方まで達していた。確認された遺構・遺物の時期は縄文時代中期、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代中期、中世及び近世に分けられる。

1 遺構

(1) 竪穴住居跡

SB01 (第3・4図)

南側調査区のE6区、F6～7区、G6～7区に位置する。北東を中心に重機による攪乱が地山まで達しており、一部壁面を完全に失っているが、南北約5.8m、東西約6.2mを測る方形の住居である。

掘り方は中央付近ではほぼ平坦であるが、北西及び南西の屈曲部付近では中央との比高差で10～15cm程の落ち込みが確認された。また、東壁、北壁の一部及び西壁の一部で幅10～20cm、深さ5cm程の壁溝が確認された。東壁の周溝は南壁との屈曲部で明瞭に途切れ、南壁では壁溝は確認されていない。支柱穴はSP13～15及びSP20で、柱間は南北約3.2m、東西約3.5mである。いずれの柱穴も、底面から

開口部にかけての軸が住居中心に向かってやや傾いていることが確認された。

黄褐色土ブロックを含む暗褐色土から成る貼り床が住居の広い範囲で確認され、住居中央やや北寄りでは硬化面も確認された。

住居の中央付近では2ヶ所の炉跡が確認された。いずれも攪乱により平面形は明確でないが、被熱による赤化が認められ、南側の炉跡付近では炭化物が確認された。第3図※1・2に示す炭化物について、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行った（V自然科学分析結果参照）。

出土遺物は第12図11～37で、13小型壺は床直上から完形で出土した。出土時、土器内部は中空で少量の黒褐色土が含まれていたが、特筆すべき内容物は確認されなかった。

SB02（第5・6図）

北側調査区のD8～9区、E8～9区に位置する。南東隅角部を重機による攪乱で失っているが、南北約5.4m、東西約5mを測る方形の住居である。

掘り方はほぼ平坦で、周囲に幅20～30cm、深さ5～10cmを測る壁溝を確認した。西壁、南壁及び北壁の一部では、居住部と壁溝の間に中央との比高差約5cmの堤状の掘り残しを確認した。支柱穴はSP63～66で、柱間は南北約2.9m、東西約2.6mを測る。いずれの柱穴も下端から開口部にかけての軸が住居中心に向かってやや傾いている。西壁溝内からは長径25cm、深さ20cmを測る同規模の小穴SP69とSP70の2穴が約2.5mの間隔で検出された。竪穴住居に伴うものであることは間違いないが、何の目的で用いられたものか具体相は不明である。

住居の広い範囲で黄褐色土ブロックを含む暗褐色土の貼り床が確認された。硬化面は、貼り床検出範囲全体にほぼ均等に認められた。住居の中央部では、不正形な範囲で灰白色粘土ブロックを含む明黄褐色土が確認された。赤化はほとんど認められなかったものの非常に強い硬化部分が認められ、炉跡と考えられるが、形状等不明な点が多い。

貼り床上には、黒褐色土層の堆積とともに多量の炭化物片が確認された。住居の北壁及び西壁には壁溝に平行するように炭化物が出土しており、SP66からは炭化物が立位で出土した。炭化物の出土量と出土状況から、焼失家屋である可能性が高いと考えられる。第5図※1・2・3に示す炭化物について、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行った（VI自然科学分析結果参照）。

第5図※4に示す住居中央南側では、貼り床面の10cm程上から黄褐色土ブロックを含む黒褐色土の硬化面が確認された。様相は下層の貼り床面と酷似するが、土層状況の観察から貼り床面との連続性はなく、一定の時期差が認められた。当該住居廃絶後、この硬化面を貼り床とする住居が存在したと想定したが、SB02とは別の住居の存在を示唆する柱穴等の痕跡は認められていない。また、前述の炭化物をはじめ、下層の貼り床上で出土した遺物の遺存状況は概ね良好で、それらの直上である当該硬化面を生活面とした別な住居が存在したとは考えにくく、性格の特定には至らなかった。

出土遺物は第12～13図38～75である。第13図、40の複合口縁壺及び51の甕は貼り床直上の出土である。第16図94に示す砥石は、SP63にやや被さる状態で出土している。貼り床面から5cm程浮いた状態で出土しており、住居廃絶後、僅かな時期差をもって遺棄されたと考えられる。

SB03（第6図）

南側調査区のF8区に位置する。SB01と切り合い関係にあるが、そのほとんどを重機の攪乱により失っているため、前後関係は不明である。検出面から掘り方までの深さは、最大で約7cmを測る。掘り方は攪乱により定かではないが、壁際が僅かに掘り窪められている。確認できた僅かな壁面から、

その平面プランは隅丸方形もしくは楕円形に近いと推定されるが、規模等の詳細は不明である。

壁面付近の覆土からは土器微細片が出土しているが、図示できる遺物はなかった。

SB04 (第6図)

南側調査区のE9区、F9区に位置する。住居の大部分が調査区外に及んでおり確認されたのは南西の一部のみで規模は不明であるが、方形ないし長方形の平面形を呈することは明らかである。掘り方はほぼ平坦で、幅15～20cm、深さ5cmの壁溝を確認した。貼り床、柱穴は確認していない。

出土遺物は第14図75の壺肩部片で、覆土からの出土である。

(2) 掘立柱建物跡

SH01 (第7図)

南側調査区のG3～4区、H3～4区に位置する。確認された柱穴は3基で、柱穴間はSP08・07間で2.6m、SP08・06間で2.4mを測る。検出面からの深さは、SP06で35cm、SP08で55cm、SP07で51cmである。SP07のみ柱痕を示す土層が確認された。

柱間の間隔と柱穴規模は、後述するSH02と近似する。南北に主軸を持つと仮定すればその方位はW-86°-Nとなり、SH02と概ね同方向を示すことから、同時期に存在、利用された掘立柱建物と考えられる。

出土遺物はなかった。

SH02 (第7図)

北側調査区のC6～7区、D6～7区に位置する。長軸の方位W-80°-Nを測る、1間×2間の掘立柱建物跡である。柱穴間はSP36・37間で約1.9m、SP37・45間で約2.1m、SP45・41間で約3.1m、SP41・43間で約2.1m、SP43・44間で約1.8m、SP44・36間で約3.2mを測る。SP45は先行するSP38と切り合い関係にある。検出面からの深さはSP36で28cm、SP37で30cm、SP45で18cm、SP41で35cm、SP43で30cm、SP44で40cmを測る。

出土遺物は第14図76と77である。

SH03 (第8図)

北側調査区のB8～9区、C8～9区に位置する。長軸の方位はW-3°-Nで、SH02と概ね直交する主軸を持つ、1間×2間の掘立柱建物跡である。柱穴間は、SP56・55間で2.16m、SP55・48間で2.15m、SP48・51間で3.45m、SP51・54間で2.0m、SP54・61間で2.13m、SP61・56間で3.14mを測る。検出面からの深さはSP56で26cm、SP55で34cm、SP48で30cm、SP51で40cm、SP54で39cm、SP61で40cmを測る。柱痕を示す土層が確認されたのはSP56のみである。

出土遺物は第14図78と79である。

(3) 性格不明遺構

SX01 (第8図)

南側調査区のE5区に位置する。平面形は中央部がくびれた歪な瓢箪状を呈し、南北1.33m、東西で0.81mを測る。遺構の立ち上がりは極めて不明瞭で、特に北東側は緩やかな傾斜となっている。遺構の深さは最深部で10cm程であるが、遺構検出時に出土土器の大部分は露頭していたことから、本来

の深さはそれ以上となる。掘り方は南北に2段の段差が認められ、上段に位置する北側平坦面と南側平坦面の比高差は6cmを測る。南端部には直径20cmの窪みが認められた。

出土遺物は第14図80～82で、遺構の中央付近、掘り方から4cm程浮いた状態で出土している。土器の出土は中央部から北側に集中し、南側では6～10cm大の礫がまとまって出土している。

SX02（第9図）

南側調査区のE2～3区に位置する。西側は調査区外に伸びるため東西方向の規模は不明であるが、南北方向で3.1mを測る。掘り方には段差があり、北東及び南東に小規模なテラスが認められる他、調査区界付近においてもテラス状の平坦部が確認された。検出当初、小規模な住居を想定したが、平面形及び掘り方は歪で、貼り床、柱穴、炉等の住居であることを裏付けるものは確認されていないため、性格不明遺構として報告する。

覆土に土器微細片が含まれていたが、図示できる遺物はなかった。

（4）その他

SP19（第9図）

南側調査区のG6～7区に位置する。最大径約1mを測る歪な円形を呈し、検出面からの深さは最深で98cm測る。SB01と切り合い関係にあり、SB01が先行する。対をなすようなピットは確認されておらず、柱穴と断定するには早計であり、遺構の性格は不明である。

出土遺物は第14図83である。

SP60（第9図）

北側調査区のB6区に位置する。南北72cm、東西48cmを測る隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは16cmを測る。底面は僅かに中央部が窪むものの、ほぼ平坦で、緩やかに彎曲した壁面を確認した。

出土遺物は第14図86～88に示すカワラケ3点で、88は底面直上、86と87は重ねられ底面から8cm程浮いた状態で出土した。

（5）周溝を伴う中世墓

SD01（第10・11図）

北側調査区のA4～6区、B4～6区に位置する。検出されたのは、幅0.9～2.5m程を測る溝のほぼ直角に屈曲するコーナー部である。一部攪乱を受け、また大半が調査区外へ展開しているため、全体形と規模については不明であるが、検出された溝の形状と溝内出土の一石五輪塔から、墓域を区画する溝、並びにその溝に囲郭された中世墓の一部と判断した。

溝の規模は幅0.9～2.5m、一辺の長さ7m以上、確認面からの深さ0.25～0.45m程を測る。溝幅の数値には開きがあるが、形状として明らかに幅の狭い箇所と幅の広い箇所が認められることから、構築当初はある程度一定の幅で構築されていたものが、後世、何らかの理由で部分的に幅広に改変された可能性がある。

溝の断面形は逆台形を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、底は0.5～1.5mの幅でほぼ平坦である。

土層観察によれば溝にはレンズ状堆積が確認され、土層中からは一石五輪塔と拳大から人頭大の礫が出土している。おそらく自然堆積として徐々に埋没、途中、一石五輪塔と礫が混入したものであろう。溝で囲郭された内側の方形部分では埋葬に関連する遺構は検出されず、また土層観察では自然堆

積であり溝の埋没土層との著しい差異は認められない。

溝の造営時期としては、溝内出土の一石五輪塔の特徴から16世紀後半代に比定できる。

当遺構の性格としては、冒頭のようにその形状と出土遺物から中世墓と判断しているが、埋葬施設等は検出されていなため、積極的に首肯できるものではない。また、屈曲する溝と一石五輪塔の出土から、遠江においては13世紀前半から14世紀後半にかけ隆盛する塚墓が想起されるが、時期、規模、埋葬形態には差異が認められ、墓を想定したとしても中世の塚墓とは異なるものと考えられる。そのため塚墓との名称を用いるに躊躇せざるを得ないことから“周溝を伴う中世墓”として詳細を「Vまとめ」に後述する。

2 遺物

(1) 縄文土器 (第12図)

2・3・8・10はSB01の覆土、1・5・9はSB02の覆土からの出土であるが、直接遺構に伴うものではなくそれぞれの遺構への流れ込みである。4・6・7は遺構外の出土である。

1は深鉢土器の胴部破片である。縄文を施文後、半截竹管内側を使用した平行沈線による区画線文を施している。区画線文内側には、半截竹管外側を使用した押しきりで印刻している。器厚はやや薄手で、堅緻な焼成である。色調はにぶい赤褐色で、胎土には長石、金雲母、白色微粒子が含まれる。

2は深鉢土器の胴部破片で、隆帯の上下は半截竹管外側を使用した押しきり文で縁取っている。隆帯下部に施された押しきり文の下には、上部より細い半截竹管を用いた押しきり文がL字状に施されている。色調は赤褐色で、胎土には僅かに長石が含まれる。

3は深鉢土器の胴部破片である。摩滅が激しいが、微隆帯の下部に沿って半截竹管による押しきり文が施される。色調は赤褐色で、胎土には僅かに黒雲母、白色微粒子が含まれる。

4は深鉢土器の胴部破片で、上部破断面付近に隆帯を持つ。隆帯は太さの異なる半截竹管外側を使用した押しきり文2条で縁取られ、細い押しきり文は破断面付近で横位から縦位に向きを変え施文されている。色調は赤黄褐色で、胎土には長石、金雲母、黒雲母が含まれる。

5は深鉢土器の胴部破片で、縄文を施した器面に半截竹管内側を使用した沈線文を施している。沈線文の下部は、粘土を下端で被るように貼付け、縄文を施文している。器厚は薄手で、堅緻な焼成によるしっかりとした器面を持つ。色調は暗褐色で、胎土には僅かな長石、金雲母が含まれる。

6は深鉢土器の胴部破片で、半截竹管の内側を使用した連続爪形文を横位に2条施している。上段の連続爪形文の下部は、これに沿うように一条の沈線を施している。連続爪形文の間は無文で、ナデにより調整している。焼成は堅緻で、しっかりとした器面を持つ。色調は赤黄褐色で、胎土には長石、金雲母、黒雲母が含まれる。

7は深鉢土器の胴部破片で、微隆帯上に半截竹管を使用したC字状の刺突文が施される。器厚は14mm前後で厚手である。色調は橙色で、胎土には長石、金雲母、黒雲母が含まれる。

8は深鉢土器の底部破片である。側面及び底部の外側をナデにより調整しており、器厚が薄手であることが特徴的である。色調は赤褐色で、胎土には長石、石英の他、黒雲母及び金雲母の微粒子が含まれる。

9は深鉢土器の底部である。側面は内側に括れるように立ち上がっており、底部付近を指頭圧痕により成形している。色調は明赤褐色で、胎土には長石、石英の他、金雲母、黒雲母が含まれる。

10は底部破片で、器形は不明である。器厚は薄手で、内側に指頭圧痕が確認できる。色調は赤褐色

で、胎土には3～4mm大の長石に加え、石英、黒雲母、白色微粒子が含まれる。

(2) 弥生土器・土師器 (第12～14図)

11～37は、SB01出土である。11は中型の壺で、口縁部の一部を欠損する以外ほぼ完存する。胴部下半に最大径を持つ丸味を帯びたプロポーションを呈し、頸部で屈曲し口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。外面調整について、口縁部には横ナデとハケ目が施され、頸部から胴部上半にはハケが施され、下半にはハケ調整後ミガキが施されている。内面調整について、口縁部にはハケ、頸部から胴部上半には指頭と板状工具によるナデ、下半にはハケが施されている。

12は中型の壺で、口縁部から胴部上半が遺存する。胴部下半に最大径を有し、頸部で屈曲し直線的に伸び口縁部に至る。外面調整について、口縁部には横ナデ・ミガキ、頸部には板状工具によるナデ、胴部には主に縦方向のミガキが施され、ミガキ前のハケが認められる。内面調整について、口縁部は上から横ナデ・ミガキ・ハケが施され、頸部から胴部にかけては指頭と板状工具によるナデが施されている。

13は小型の壺で、口縁部の一部を欠損する以外ほぼ完存する。器高が低く胴中央部に最大径を有し、頸部が短く弱く彎曲する。外面は摩滅しているが、内面は頸部付近に指頭による調整、胴部にはハケ目が確認できる。

14は甕の口縁部片で、器壁が薄く、頸部の屈曲は明瞭で口縁部は外反気味に立ち上がる。内外面とも横ナデが施されている。

15は壺の口縁部片で、内外面ともにナデとナデ調整前のハケ目が確認できる。

16は壺の口縁部片で、内外面ともに口唇部に横ナデが確認できる。

17は壺の口縁部片で、やや内彎して立ち上がる。内面には横ナデ、指頭によるナデ調整が確認できる。

18は複合口縁壺の口縁部片で、内彎気味に立ち上がり下部では粘土を折り返して複合部を形成している。内外面とも摩滅気味であるが、ハケ目が確認できる。

19は複合口縁壺の口縁部から頸部片で、垂直気味に立ち上がる頸部から外反して折返しの口縁部に至る。口縁部には4本単位のキザミが確認できる。

20は折返口縁壺の口縁部片で、端部にはキザミが施されている。

21は壺の頸部から肩部片で、外面には板状工具によるナデとミガキ、内面には板状工具と指頭によるナデ、一部にハケ目が確認できる。

22は折返口縁壺の頸部片で、外反する頸部から強く屈曲して口縁部に至る。外面には縦位のミガキ、内面にはハケ目とナデが確認できる。

23は壺の肩部片で、櫛刺突羽状文が確認できる。

24は壺の胴部上半片で、単節RL縄文が施されている。

25は壺の胴部片で、櫛状工具による扇状文が施されている。

26は壺の底部片で、外面にはミガキとナデ、内面にはナデが施されている。

27は壺の底部片で、端部が張り出し外面にはナデが施されている。

28は壺の底部片で、外面にはミガキ、内面にはハケが施されている。

29は壺の底部片で、外面にはナデ、内面にはハケが施されている。

30はS字状口縁台付甕の底部片で、外面にはハケ、内面にはナデが施されている。

31はS字状口縁台付甕の脚台部片で端部が内面に折り返されている。

32は高坏の口縁部片で、外面には横位のミガキ、内面上方には横位のミガキ、下方には縦位のミガキが施される。

33は、高坏の坏部片である。

34・35は、高坏の脚部片である。

36は、高坏の脚端部片である。

37は広口埴で、やや扁平気味の胴部から外反して立ち上がる口縁部に至る。外面はミガキと一部ミガキ前のハケ目が確認できる。内面は摩滅しているが、ミガキが確認できる。

38～75は、SB02出土である。38は壺の口縁部片で、外面には縦位のハケ、内面には横位のハケがそれぞれ施されている。

39は壺の口縁部片で、外面にはハケ目、内面にはナデが確認できる。

40は複合口縁壺の口縁部片で、一次・二次口縁ともに外反して立ち上がる。全体に器面荒れが著しいが、外面の一部にナデ、内面には縦位のハケ目が確認できる。

41は柳ケ壺の口縁部片で、内外面に櫛状工具による刺突羽状文が確認できる。

42は壺の頸部片で、直立する頸部から外反して口縁部に至る。外面は器面荒れが著しいが、内面にはミガキ・ハケ目・ナデが確認できる。

43は壺の肩部片で、櫛状工具による扇状文が施されている。

44は壺の胴部片で、単節RL縄文が施されている。

45は壺の胴部下半片で、胴下半に弱い屈曲を持ち外反して立ち上がる。外面には幅広のミガキとミガキ前のハケ目が確認できる。内面は板状工具によるナデが施されている。

46～50は壺の底部片である。46の外面にはナデ、47の外面にはハケ目→ミガキ、48の内面にはハケ目、49の内外面にはミガキが確認できる。

51は甕で、ほぼ完存する。丸底から球形状の胴部に至り胴部中央に最大径を持つ。屈曲する頸部から口縁部へ外反して立ち上がり、端部は面取りされている。口縁部は内外面ともに横ナデされ、胴部外面は摩滅しているが、縦位のハケ目と一部に煤付着（スクリーントーン）が認められる。胴部内面は指頭と板状工具によるナデが施されている。器形の特徴から布留式土器に比定できる。

52は甕の口縁から頸部片で、口縁外面には横ナデ、頸部外面には縦位のハケが施される。口縁内面は横ナデ、頸部内面にはハケ目、胴部内面にはナデがそれぞれ施されている。

53は甕の口縁部片で、口縁外面には横ナデ、頸部にはハケ目、内面にはハケ目が確認できる。

54は台付甕の口縁部片で、口縁部にはハケ、口縁端部にはキザミが施されている。

55は台付甕の接合部片で、内外面ともハケが施されている。

56・57はS字状口縁台付甕の口縁部片で、S字状口縁部の屈曲は57の屈曲に比し56の屈曲が強い。

58・59はS字状口縁台付甕の接合部片である。

60～62はS字状口縁台付甕の脚部片である。

63は高坏の坏部で、内彎気味に立ち上がる。内外面ともにミガキが確認できる。

64は高坏の坏部で、体部から口縁部にかけて弱い屈曲が確認できる。内外面ともに横ナデ→ミガキが施されている。

65～67は高坏の坏部片で、65には屈曲がみられ、66・67は直線的に立ち上がる。いずれも外面には細かいミガキ、内面には幅広のミガキが施されている。

68～72は高坏の脚部片で、形状と大きさの差異はあるが、いずれも外面にはミガキが施されている。

73・74は小型丸底埴で、どちらもほぼ完存し球形状の胴部から大きく外反する口縁部をもち口縁は

やや内彎する。73に比し74の方が胴部の張りが強く、73では幅広の工具によるミガキであるが、74では棒状工具による細かいミガキが施されている。

75は、SB04出土の壺肩部片で、櫛描波状文が施されている。

76・77はSH02出土である。76はS字状口縁台付甕の口縁部片で、口縁部の屈曲は強くない。

77はS字状口縁台付甕の脚台部片である。

78・79は、SH03出土である。78の壺底部片で、内外面にミガキが確認できる。

79は小型丸底埴の胴部片と頸部片で、外面には細い工具によるミガキ、内面には幅広の工具によるナデが確認できる。

80～82は、SX01出土である。80は小型丸底埴の頸部片で、内外面ともにミガキが確認できる。

81は甕口縁部から頸部片で、屈曲した頸部から外反して口縁部に至り、端部で小さく外反する。口縁内外面ともに横ナデ、胴部内外面には板状工具によるナデが認められる。

82は甕で、胴部下半から底部を欠損する。全体に扁平で、胴部中央に最大径を有し屈曲した頸部から外反して口縁部に至る。内外面ともに器面荒れが著しいが、口縁部外面にはナデ、内面には板状工具によるナデが確認できる。

83はSP19出土の小型丸底埴の口縁部片で、内外面とも細かいミガキが施されている。

84はSP20出土の甕の口縁部片で、外反して立ち上がるものであるが、口縁中位からさらに外反がみられる。器壁は薄くシャープな造りである。外面は横ナデ、内面には指頭によるナデが確認できる。

85は遺構外出土の口縁部片で、推定口径32cmを測る大型である。口縁部は外反して立ち上がり端部を内側に折り返している。外面は器面荒れが著しいが、内面は端部折返し部分に指頭によるナデが施され、指頭痕も確認できる。その特徴的形態からいわゆる大廓式の壺に比定されるもので、胎土には石英粒子を含む。在地とは異なることから搬入品であろう。

(3) カワラケ (第14図)

86～88は、SP60出土のロクロ成形のカワラケである。口径9cm前後、底径4cm前後を測る同一規格で、いずれも底部糸切り痕がみられ、口縁は歪みが著しい。

(4) 石塔 (第15図)

89～92は、SD01出土の砂岩製(森・日坂産)の一石五輪塔である。89は高さ26cmを測る小型タイプで、火輪と地輪の一部を欠損する以外はほぼ完存する。それぞれの部位の著しい形骸化はなく比較的端正な造りである。

90も高さ25.5cmを測る小型タイプで、空風輪等の一部を欠損する以外ほぼ完存する。図示したように断面形は方形ではなく台形を呈す。

91・92は、どちらも砂岩製(森・日坂産)の一石五輪塔の空風輪で、それ以下を欠損するが、89・90同様の高さ25cm前後の小型タイプであろう。

(5) 石器 (第15・16図)

93は砂岩製の敲石で、長径10.0cm、短径8.8cm、最大厚5.7cm、重量805gを測る。長径両端部に敲打痕のほか、表裏両面には凹みも認められることから、敲石と磨石の機能を併せ持つものである。

94は砂岩製の砥石で、最大長32.3cm、最大幅20.8cm、最大厚10cm、重量9.7kgを測る。不整形の自然石の一面(スクリーントーン)を砥石として利用しているが、使用面は中央部で尾根上に稜線を持つ

ことから、2つの使用面が隣り合っている。

V まとめ

1 縄文土器について

和田岡原における縄文時代は、瀬戸山Ⅰ・Ⅱ遺跡、向山遺跡、吉岡下ノ段遺跡で押し型文土器が発見されていることから早期に始まると考えられているが、出土量が僅かであり未だ不明な点が多い。中期に入ると、今坂遺跡、高田遺跡、中原遺跡で石囲い炉を伴う住居跡の調査例があるが、これについても調査例は僅かである。しかし、遺構に比し遺物（土器）は、地点による出土量の多寡はあるものの和田岡原全域で確認されている。遺構と遺物の検出量にはギャップが見られ、その原因の一つとして考えられるのは、その後の弥生時代後期～古墳時代前期の集落が、和田岡原全域に確認されていることから、それ以前の遺構の多くが攪乱もしくは消滅してしまった可能性がある。今後、縄文時代の遺跡調査例の増加を期待したいところであるが、遺物の出土状況の分布や密度についても、詳細に検討していく必要がある。

さて、今回の発掘調査で出土した縄文土器は僅かで、いずれも小片である。土器について詳細な言及はできないが、2・3・4・8に示す深鉢土器破片は、ザラザラとした器面、施文の特徴から、勝坂式土器に比定可能と考えられる。一方で、1・5・6に示す薄手の土器はいずれも堅緻な焼成で、半截竹管を使用した隆帯の縁取りや区画等の施文の特徴から、勝坂式土器に並行する東海系の影響下にある土器と言える。1は施文の特徴から、5・6に先行する可能性も考えられるが、いずれも概ね中期中葉に属す土器であると捉えておきたい。

2 弥生時代～古墳時代の遺物・遺構について

和田岡原において、弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が相当の面的広がりをもって展開している点は、「Ⅰはじめに」にて述べたとおりである。ここでは、吉岡下ノ段遺跡のほぼ中央に位置する本発掘調査の結果について、周辺の調査結果も踏まえ整理してみたい。

調査で検出された堅穴住居跡の内、全体像が確認されたSB01、02は、一辺5m前後の方形プランに4本の支柱穴を持つ、当地域における典型的な古墳時代の堅穴住居跡と言える。特筆すべきは、SB02内出土の布留式土器（51）である。和田岡原においては、女高Ⅰ遺跡出土に次ぐ事例である（掛川市教育委員会 1983）。また、遺構外出土であるが85に示す壺型土器は、静岡県東部において分布の中心が見られる大廓式土器で、吉岡下ノ段遺跡第12次発掘調査に次ぐ事例である（掛川市教育委員会 2017）。これらの外来系土器の出土が当遺跡の東西交流についてどのように位置付けられるのか、今後の検証が必要である。

検出された3棟の掘立柱建物跡は、出土遺物から古墳時代前期に比定されるもので、堅穴住居と合わせて建物群を形成していたと考えられる。

ここで、周辺の調査結果に目を移すと、北側隣接地で実施した確認調査（第10次）では遺構は検出されていない。また、吉岡下ノ段遺跡の北端に位置する第1次・4次・13次発掘調査地点においても遺構は検出されていない。このことから、本発掘調査地点が吉岡下ノ段遺跡における古墳時代前期の

集落の北端に位置すると考えられる。また、本発掘調査地点の東西に位置する第12次・14次発掘調査地点及び南の段丘端部に位置する第11次発掘調査地点の調査結果と比べると、同時期でありながら遺構の密度には明らかな相違が認められる。

なお、時代が前後するが、弥生時代後期の遺物、遺構について概観してみると、本発掘調査において、少量ながら土器の出土は認められるものの、明らかに当該期に比定される遺構は検出されていない。第11次、12次、14次発掘調査地点では、いずれも竪穴住居跡等が検出されていることを勘案すると、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が同地点において連綿と営まれるばかりでなく、地点を異にしてとりわけ古墳時代前期には拡散の傾向が示唆される。

3 周溝を伴う中世墓について

和田岡原でのこれまでの発掘調査において、中世墓はおろか確実に中世にさかのぼる遺構は検出されていない。近世にいたっても土坑墓・火葬墓（茶毘墓を含め）などの葬送関連遺構が散見される程度で、掘立柱建物跡や石場建て建物跡等の居住関連遺構は検出されていない。したがって、和田岡原における中近世の葬送はおろか居住形態をはじめする生活様相全般について、全くと言っていい程不明な点が多いのが現状である。そのような状況下、今回の調査では、戦国末期（16世紀後半）に比定可能な周溝を伴った中世墓と、そこに造立されていた可能性が高い一石五輪塔が検出されたことは特筆に値すべき成果である以上に和田岡原の歴史、とりわけ中世から戦国期にかけての葬送を検討するうえで非常に貴重な新資料が追加されたと評価できる。ここでは、この周溝を有した中世墓の素描として関連事項を整理するとともに、その造営の具体相と背景について少々の予察的言及を試みたい。

今回検出されたのはほぼ直角に屈曲する溝の一角であり、大半が調査区外へ展開するため果たして周溝として囲郭する形状を採るのか否かも含め、その形状は明確ではない。したがって遺構の名称については迷うところであるが、便宜上、“周溝を伴う中世墓”として論を進めたい。

中世墓において、周溝を伴った形態としては塚墓が想起される。遠江における塚墓の出現と終焉いわゆる消長をみると、東海地方を代表する中世集団墓地である一の谷中世墳墓群では13世紀前半に出現するとされ、その後しばらく墓制の主流を占める。その後、墓制には集石墓・土坑墓・「コ」の字区画墓・火葬遺構が加わり、14世紀後半には集石墓が主流となり、塚墓は終焉していく。塚墓の葬法は、土葬が大半を占めるとされる（磐田市教育委員会 1993、木村 2006、松井 2009）。

当遺跡での周溝を伴った中世墓の時期を検討すると、時期比定の根拠となるものが周溝内出土の一石五輪塔で、かつては周溝に囲郭された内側部分に造立されていたものが経年の中で周溝内に転落した可能性が高く、一石五輪塔の特徴から16世紀後半に比定され、この周溝を有した中世墓の造墓時期も同時期と判断した。

形態と規模について、前述のとおり不明な点が多いが、何らかの埋葬施設とそれを囲郭する溝が巡る形態を想定したい。規模は、一辺7mを超えるものと考えられる。

埋葬部について、周溝に囲郭された内側部分を精査したが、埋葬施設は確認されていない。周溝に囲郭された部分の地山上に塚状のマウンドが存在していたとすれば、そのマウンド内に埋葬施設が存在していたと考えられる。しかし、マウンドの痕跡は土層観察によっても確認されていない。前述のように一石五輪塔が溝内から出土していることから、マウンドも経年の中で流出してしまった可能性は否定できず、マウンド内に埋葬施設が存在していた可能性が十分考えられる。

一の谷中世墳墓群等でみられる塚墓との比較において、まず規模ではこの溝が周溝として囲郭する

形状を持つものと想定した場合、一般的な塚墓の一辺7m程の規模と比べると一回り以上大きくなるものと想定される。時期について、周溝を伴った中世墓は、16世紀後半の造営であり14世紀後半までさかのぼるものではないことは明確である。埋葬形態をみると一の谷中世墳墓群では、埋葬施設を地山まで掘り込んで構築しているが、周溝を伴った中世墓では周溝に囲郭された部分に存在した可能性が高いものの地山まで掘り込まれていないことなど明らかな差異がみられる。したがって、塚墓との比較においては周溝に囲郭された全体形態こそ類似するものではあるが、造営時期、規模、埋葬施設に明確な差異がみられ、いわゆる13世紀前半から14世紀後半に造営された塚墓とは異なるものであり、同一系譜上にある中世墓ではないと考えられる。

冒頭のように和田岡原での中世の葬送にかかる遺構は未だ検出されていないことと、市内はおろか周辺域においても同類および類似する中世墓は検出されていないため、戦国期、当地域の葬送の様相を探る手立てとして文献史料から探ってみたい。『円通院松堂禪師語録』には、文明16年（1484）に和田岡原で挙行された盂蘭盆大齋（施餓鬼会）の記述がある。『円通院松堂禪師語録』（以下、語録）は、15世紀中葉から後半にかけ曹洞宗の松堂禪師が記した語録で、吉岡原を含む市西端にあった原田荘をはじめとする遠江での往時の災害や戦乱などの諸事の記録とともに、武家文化人との交流、曹洞宗における葬祭にかかる史料としても貴重かつ著名である。松堂禪師は、永享3年（1431）遠江国原田荘寺田郷に生まれ、郷内の曹洞宗円通院に出家、その後、森町大洞院・加賀仏陀寺・能登総持寺の住持を経て円通院に戻り、兵火により灰燼に帰していた荘内の古刹長福寺の再興に尽力した。師である如仲天閻禪師とともに東海において曹洞宗の教線拡大に努めた人物として著名であり、また、仏法の教えのみならず、多岐にわたる語録の内容からも博識稀なる人物であることがわかる。ちなみに吉岡下ノ段遺跡が所在する吉岡原の一部が原田荘に含まれる。

語録には、文明16年（1484）数雲塚原と呼ばれた吉岡原の一角において挙行された盂蘭盆大齋の様子が記されている。道場にみたてた数雲原塚の草庵には近隣寺院から僧侶が雲集、くわえて近隣遠郷、東隣西村から貴賤の老若男女が多数集い、民衆は御供を具え、僧侶は法華経を読誦、10日足らずで法華経一千部を読み終えたとされる。貴賤の記述からは、参集した階層として国人領主原氏一族から農民を中心とした庶民に至る幅広い層に及んでいたことがわかる。また、近隣近郷、東隣西村の記述からは原野谷川流域およびその周辺村落の民衆が多数参加したことがわかる。

広瀬良弘は、この記述から曹洞宗の教線拡大が葬祭を通じて在地武士から庶民に至るまで深く浸透していったことを示唆するものとし、さらに語録中の別記述から葬祭にはいくつかの階層差が存在していたことなどを指摘している（広瀬 1988）。

圭室文雄は、語録中の座禅修行と葬祭についてそれぞれの記述の出現頻度を比較、座禅修行8%に対し葬祭92%と葬祭の記述が圧倒することから、曹洞宗寺院経営においてその中心が開基檀那の菩提供養から庶民の葬祭に転換していったことを追認している（圭室 2009）。

足立順司も早くから語録に頻出する葬祭記述に注目しており、土葬と火葬の割合を分析、土葬16%に対し火葬84%と当該期には火葬が圧倒することから、圭室同様、当該地における曹洞宗寺院の葬祭転換があったことを示すとともに、その葬送内容を明らかにした（足立 1997）。また、広瀬が指摘した階層性についても戒名の分析を試みている。

これら先達の指摘にあるように、原田荘をはじめとする遠江においては、松堂禪師と如仲天閻禪師らによる曹洞宗の教線拡大の中で、葬祭を通じ武士層から庶民にいたるまで幅広く浸透、さらに荘域内での葬送に関しては、火葬が圧倒を占めていたことがわかる。

語録にある数雲塚原にて盂蘭盆会が挙行されたのが文明16年（1484）であるから、周溝を伴った中

世墓の造営を16世紀後半とすれば、一世紀近くのタイムラグがある。そのため上記の内容は、周溝を伴った中世墓造営の背景として積極的に首肯できるものではない。しかし、遠江においては、曹洞宗が江戸時代を経て今日に至るまで隆盛、全時代を通じ葬祭に関しても曹洞宗の影響下にあることから、16世紀後半代においても通有していたとするのが妥当であろう。したがって、周溝を伴った中世墓の造営にあたっては曹洞宗の影響下にあったと考えられ、葬送に関してもこのデータを引用するならば、火葬であった可能性が高いと考えられる。さらにマウンドとそれを囲郭する周溝は、他との差別化の具象でもあり、被葬者の具体相にまで言及できるものではないが、一般庶民とは画した上層階級を想定してもよからう。

造営の具体相にも言及したが、形態・規模・埋葬施設等の構造をはじめとし不明な点が多いことに加え、タイムラグを承知の上で語録の引用の上に推論を重ねたものであり、現段階においては付会の感は否めない。当遺構にかかる関連事項の整理と課題提起としての駄文とご寛容いただきたい。従前ではあるが、類例の増加に期したい。

参考文献

- 足立順司 1997 「県下の六道銭と墓」『静岡県における中世墓』静岡県考古学会
磐田市教育委員会 1993 『一の谷中世墳墓群遺跡』
掛川市教育委員会 1983 『行人塚遺跡』
掛川市教育委員会 1984 『中原遺跡 発掘調査報告書』
掛川市教育委員会 1988 『中原遺跡 発掘調査報告書』
掛川市教育委員会 2017 『吉岡下ノ段遺跡第11・12次 発掘調査報告書』
掛川市教育委員会 2019 『吉岡下ノ遺跡第14次・吉岡原遺跡第14次 発掘調査報告書』
木村弘之 2006 「磐田市「一の谷中世墳墓群」の再検討」『墓場の考古学』東海考古学フォーラム
佐藤悦成 編著 2008 『訓註 曹洞宗禅語録全書』第13巻 円通院松堂禅師語録（三～五）四季社
圭室文雄 2009 「檀家制度と成立と展開」『明治大学教養論集』第447号 明治大学教養論集刊行会
広瀬良弘 1988 「曹洞禅僧の地方活動 - 遠江国における松堂高盛の活動を中心として -」『禅宗地方展開史の研究』吉川弘文館
松井一明 2009 「東海の中世墓」『日本の中世墓』狭川真一編 高志書院

VI 自然科学分析結果

1 分析方法

(1) 樹種同定

剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各切片を作成し、双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

(2) 放射性炭素年代測定

試料は、試料の状況を観察後、分析用試料とする。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に

生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に 1 mol/Lであるが、試料が脆弱な場合や少ない場合は、アルカリの濃度を調整して試料の損耗を防ぐ（AaAと記載）。試料がさらに少ない場合、アルカリ処理を行うと測定に必要な炭素が得られなくなるため、1 mol/Lの塩酸処理のみにとどめている（HClと記載）。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径 1 mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX-II）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

$\delta^{13}\text{C}$ は試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma:68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach,1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3（Bronk,2009）を用いる。較正曲線はIntcal13（Reimer et al.,2013）を用いる。

2 結果

（1）樹種同定

結果を表1に示す。炭化材は、広葉樹2種類（アカガシ亜属、スダジイ）が検出される。以下に検出された試料の解剖学的所見を述べる。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*）

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で1～15細胞高のものと、複合放射組織とがある。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai） ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。

（2）放射性炭素年代測定

結果を表2に示す。今回は加速器質量分析計による年代測定に必要な炭素量は十分回収できている。同位体補正を行った測定値は、K231（16）72が $1,705 \pm 20\text{BP}$ 、K231（16）74が $1,750 \pm 20\text{BP}$ 、K231（16）229が $1,760 \pm 20\text{BP}$ 、K231（16）230が $1,760 \pm 20\text{BP}$ 、K231（16）232が $1,745 \pm 20\text{BP}$ である。

表2および図1には較正暦年代も呈示する。暦年較正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、その後訂正された半減期（¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差 2σ の暦年代は、K231（16）72が3世紀後半から4世紀末、K231（16）74が3

世紀前半から4世紀後半、K231(16) 229が3世紀前半から4世紀前半、K231(16) 230が3世紀前半から4世紀前半、K231(16) 232が3世紀前半から4世紀後半である。

3 考察

検出された炭化材の樹種は、いずれも常緑広葉樹（アカガシ亜属、スダジイ属）である。これらは暖地において安定した森林を構成する要素（いわゆる照葉樹林）であり、現在の調査地周辺においても自然度の高い場所に生育する種類である。また、重堅な木であることから、器具材として使われることが多い。特に硬さを必要とする農具の柄は、温暖な地域においてはほとんどがカシである（伊東隆夫・山田昌久編,2012）。

それら炭化材の放射性炭素年代測定からは、暦年代でおよそ3世紀前半から4世紀末までの年代資料が得られた。これは、発掘調査所見により示された古墳時代前期とする住居跡の年代観をほぼ支持する資料であると言える。

表1 樹種同定結果

遺構名	遺物台帳番号	種類名	状態	年輪数	年代測定
SB01	K231(16)72	シイ属	破片	4	外2-3年
SB01	K231(16)74	シイ属	ミカン割り	17	外2-3年
SB02	K231(16)229	アカガシ亜属	ミカン割り 樹芯あり	13	外2-3年
SB02	K231(16)230	シイ属	丸木 樹芯有り	9	外2-3年
SB02	K231(16)232	アカガシ亜属	丸木 樹芯有り	12	外2-3年

表2 放射性炭素年代測定結果

試料	種別/ 性状	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代			Code No.		
					年代値		確率 %			
K231(16) 72	炭化材 (シイ属)	AAA (1M)	1705±20 (1704±20)	-25.38 ±0.20	σ	cal AD 265 - cal AD 271	1685 - 1679 cal BP	5.3	YU- 10537	pal- 12345
						cal AD 332 - cal AD 385	1618 - 1565 cal BP	62.9		
					2σ	cal AD 257 - cal AD 297	1693 - 1654 cal BP	19.9		
						cal AD 321 - cal AD 395	1630 - 1555 cal BP	75.5		
K231(16) 74	炭化材 (シイ属)	AAA (1M)	1750±20 (1748±20)	-28.04 ±0.22	σ	cal AD 251 - cal AD 263	1700 - 1687 cal BP	12.4	YU- 10538	pal- 12346
						cal AD 275 - cal AD 330	1676 - 1621 cal BP	55.8		
					2σ	cal AD 237 - cal AD 347	1714 - 1603 cal BP	94.8		
						cal AD 373 - cal AD 376	1578 - 1574 cal BP	0.6		
K231(16) 229	炭化材 (アカガシ亜属)	AAA (1M)	1760±20 (1760±20)	-27.46 ±0.19	σ	cal AD 243 - cal AD 260	1707 - 1691 cal BP	18.4	YU- 10539	pal- 12347
						cal AD 280 - cal AD 325	1670 - 1626 cal BP	49.8		
					2σ	cal AD 229 - cal AD 340	1721 - 1610 cal BP	95.4		
K231(16) 230	炭化材 (シイ属)	AAA (1M)	1760±20 (1758±20)	-27.69 ±0.32	σ	cal AD 245 - cal AD 260	1706 - 1691 cal BP	16.9	YU- 10540	pal- 12348
						cal AD 280 - cal AD 325	1671 - 1626 cal BP	51.3		
					2σ	cal AD 231 - cal AD 341	1719 - 1609 cal BP	95.4		
K231(16) 232	炭化材 (アカガシ亜属)	AAA (1M)	1745±20 (1747±21)	-27.93 ±0.37	σ	cal AD 252 - cal AD 264	1699 - 1687 cal BP	12.0	YU- 10541	pal- 12349
						cal AD 274 - cal AD 330	1676 - 1620 cal BP	56.2		
					2σ	cal AD 237 - cal AD 350	1714 - 1601 cal BP	93.9		
						cal AD 369 - cal AD 378	1581 - 1573 cal BP	1.5		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
- 6) 暦年の計算には、補正年代に（ ）で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、 2σ が95.4%である

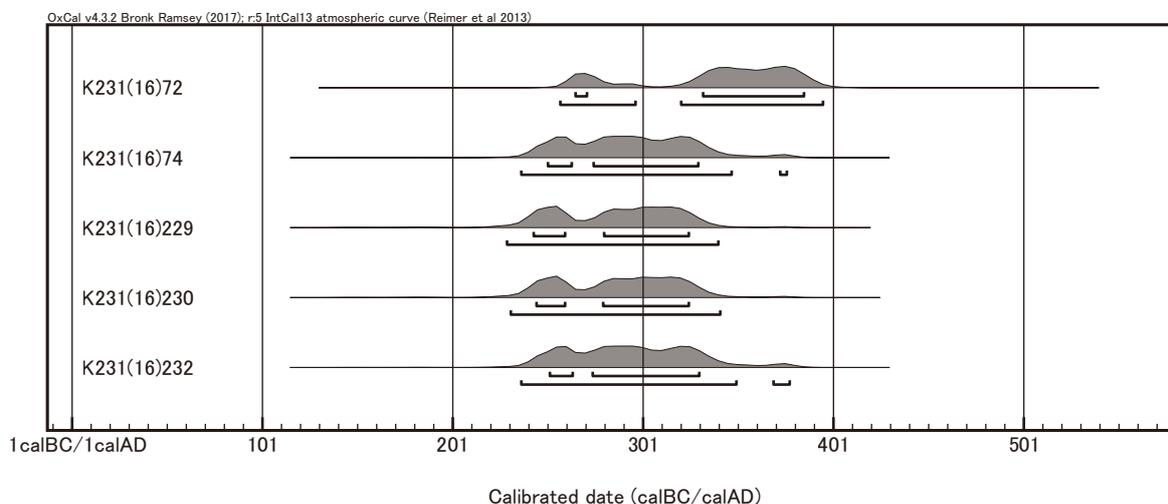
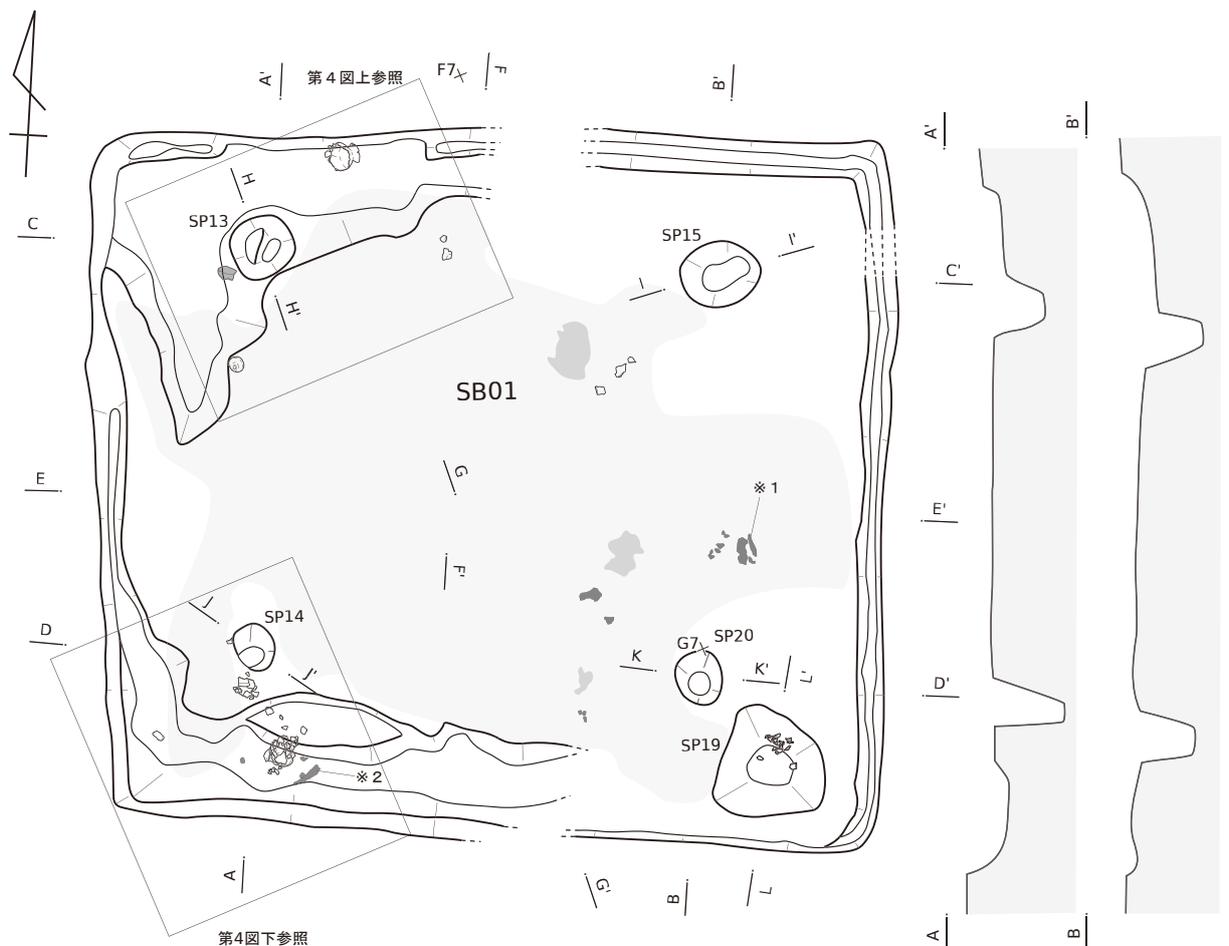
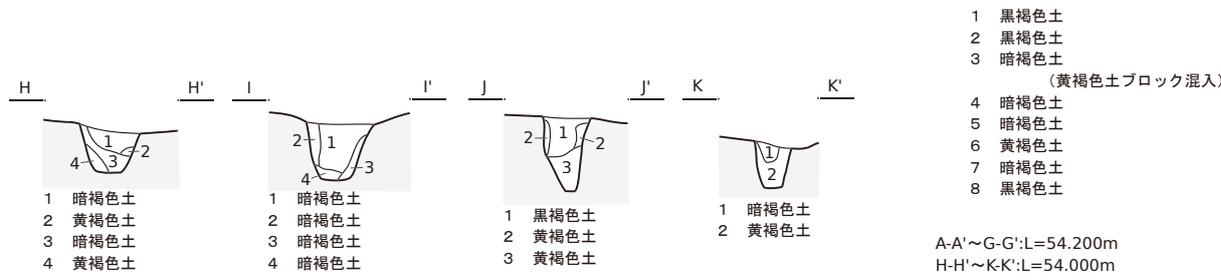
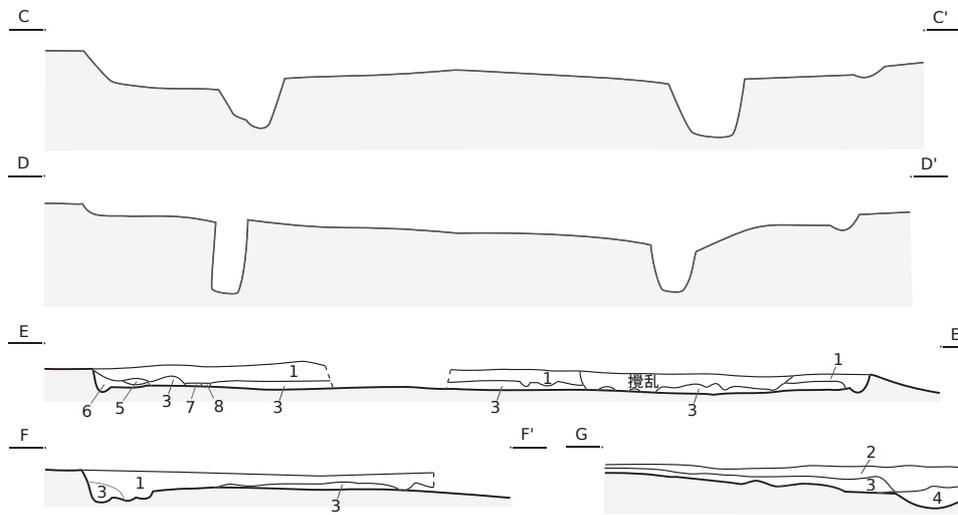


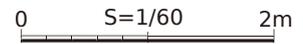
図1 暦年較正結果



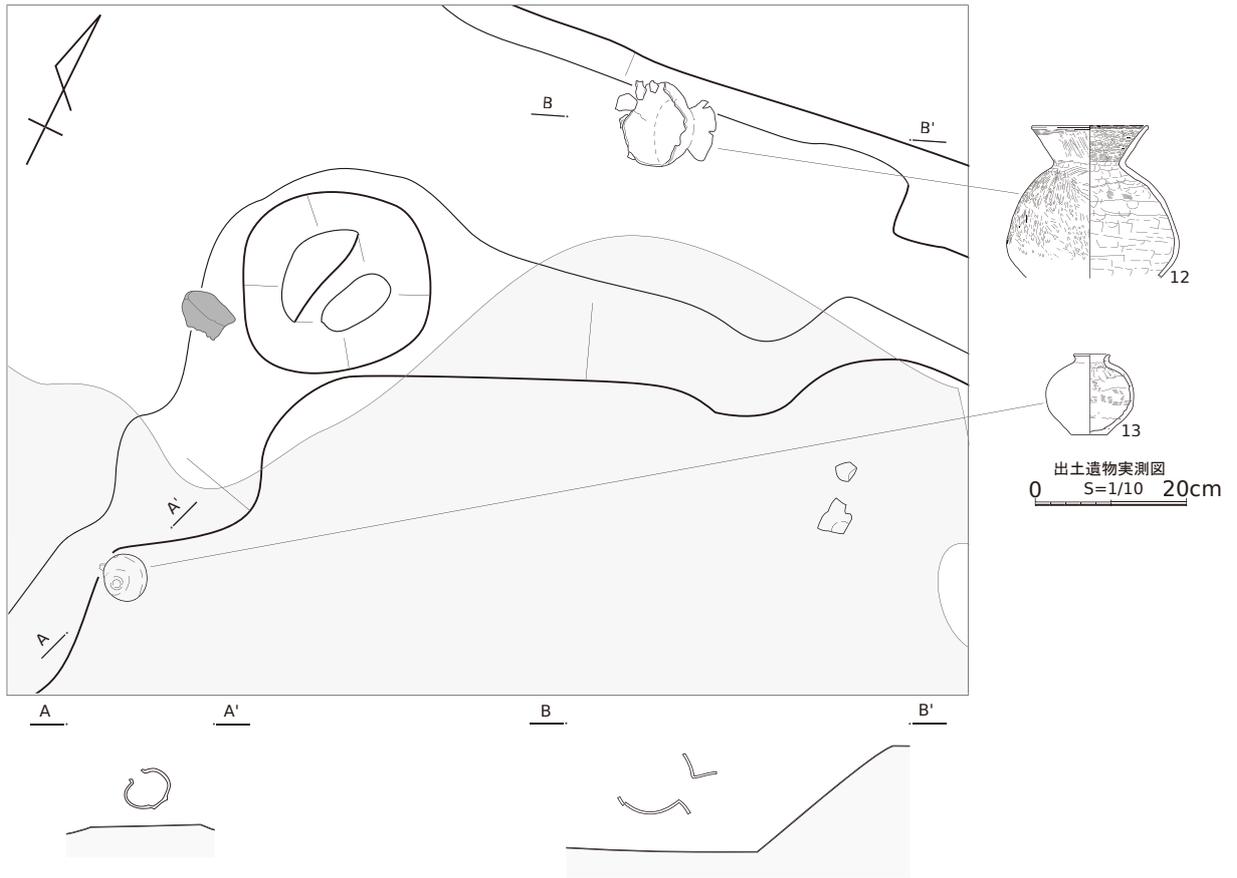
自然科学分析報告番号
 ※1 K231(16)72
 ※2 K231(16)74



A-A'~G-G':L=54.200m
 H-H'~K-K':L=54.000m



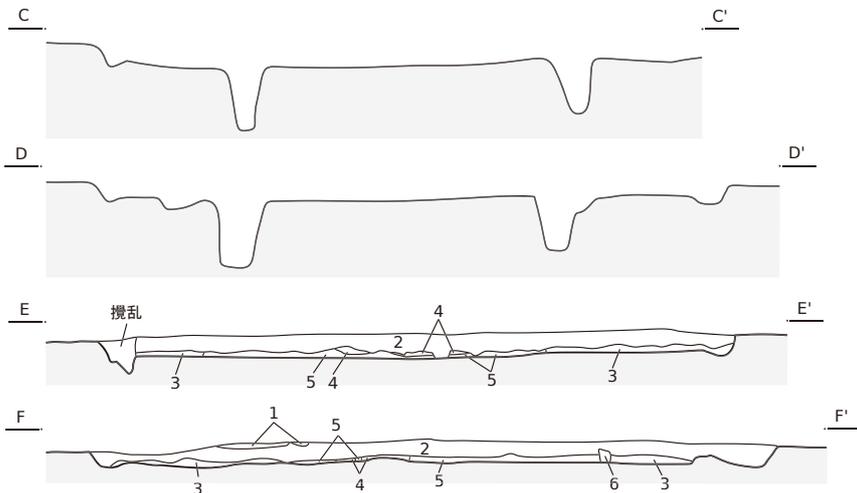
第3図 SB01実測図(1)



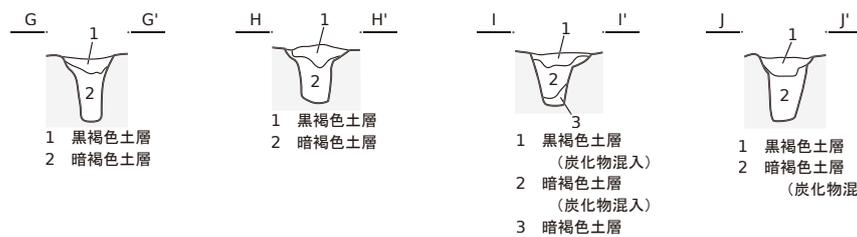
第4図 SB01実測図(2)



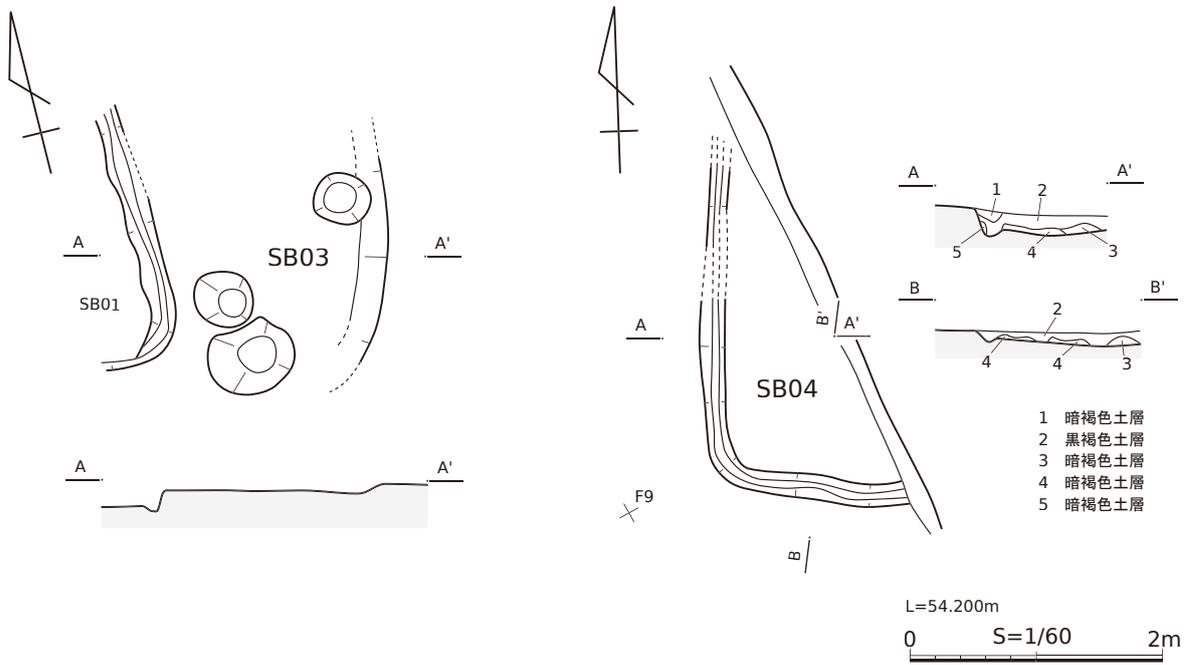
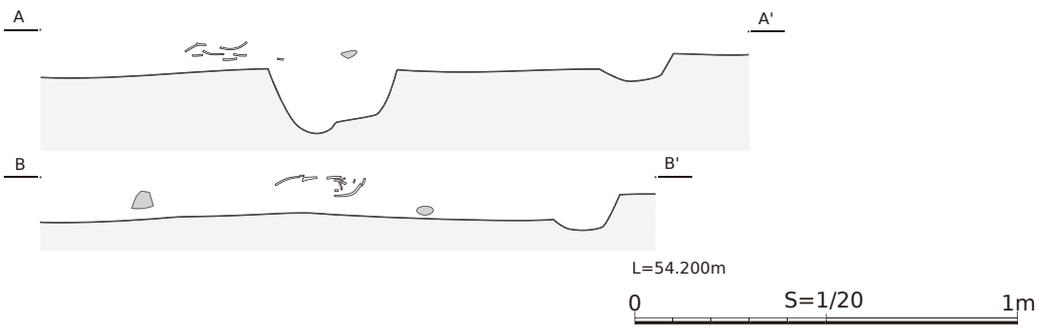
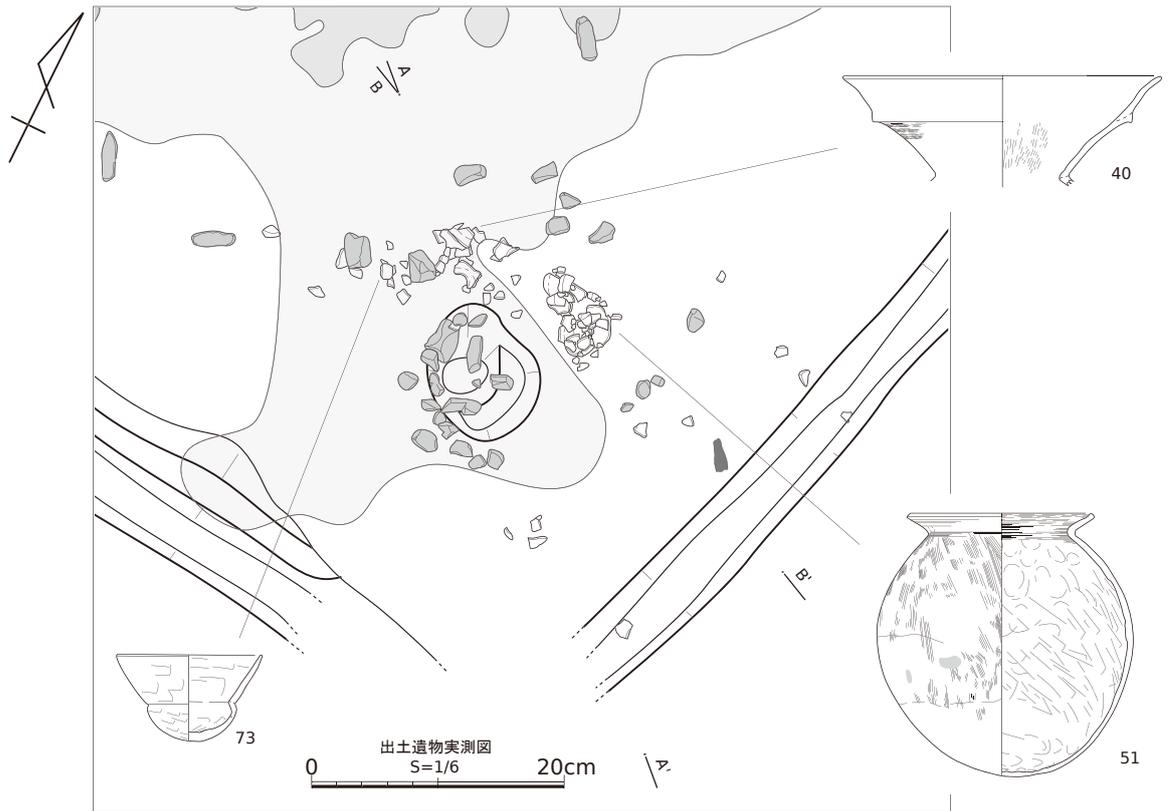
自然科学分析報告番号
 ※1 K231(16)229
 ※2 K231(16)230
 ※3 K231(16)232



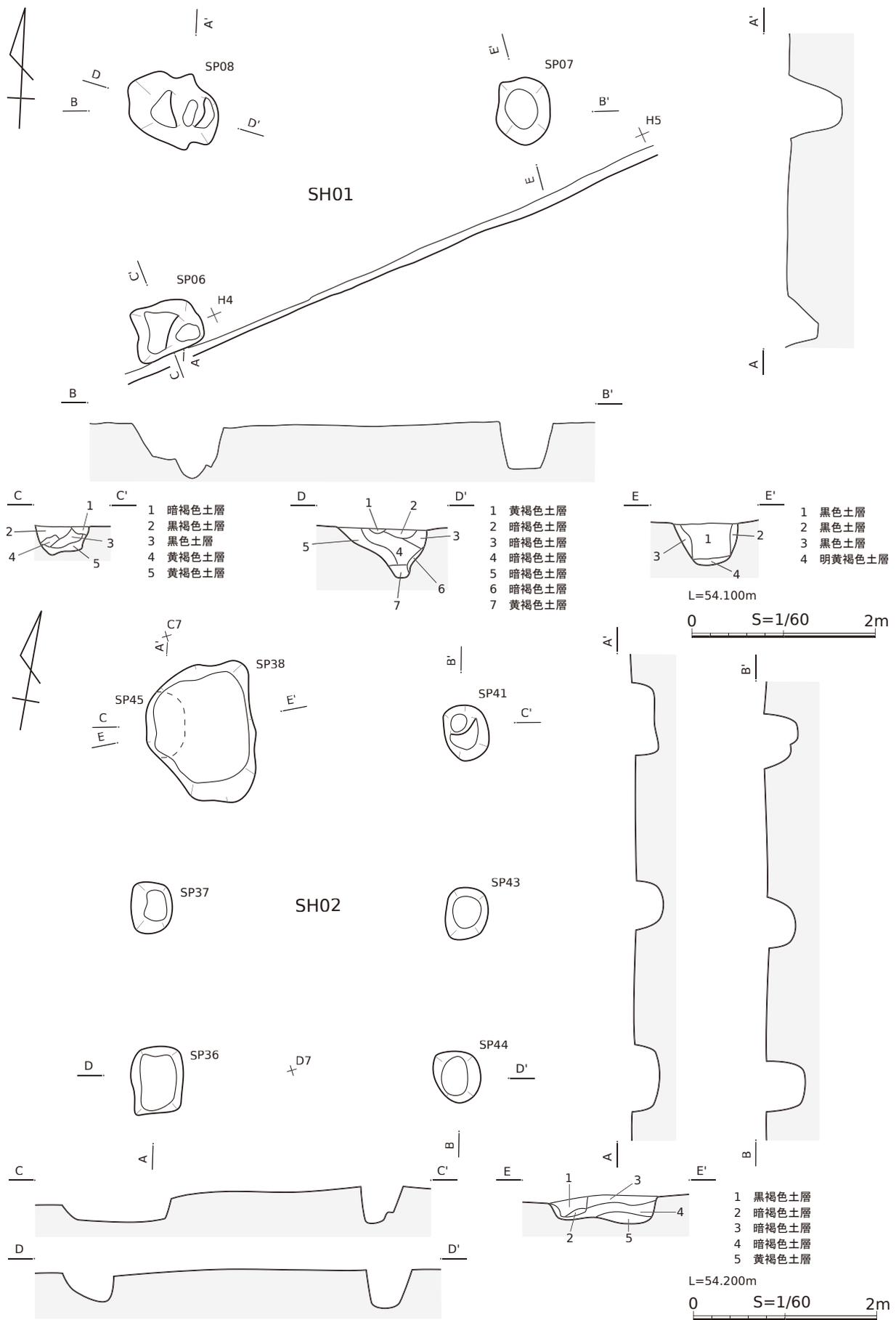
- 1 暗褐色土層
(黄褐色ブロック混入)
- 2 黒褐色土層
(炭化物混入)
- 3 暗褐色土層
(炭化物混入)
- 4 明黄褐色土層
- 5 暗褐色土層
(黄褐色ブロック混入)
- 6 黄褐色土層



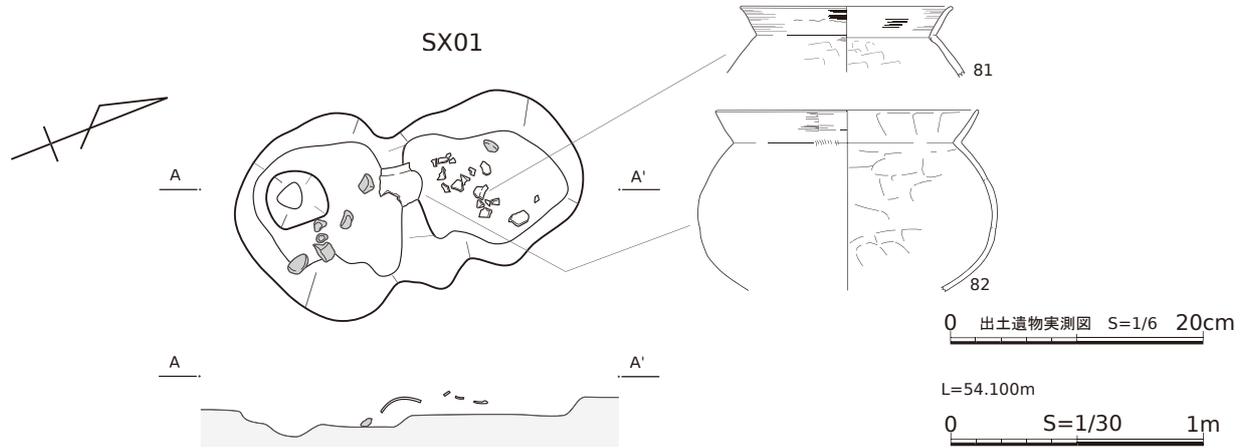
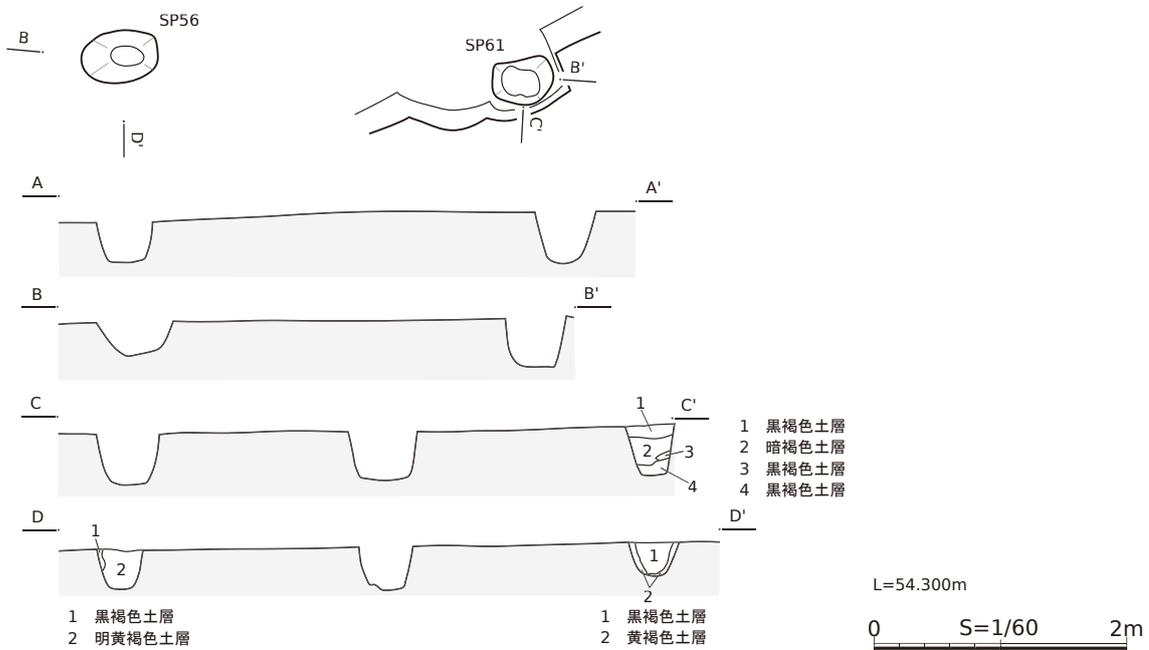
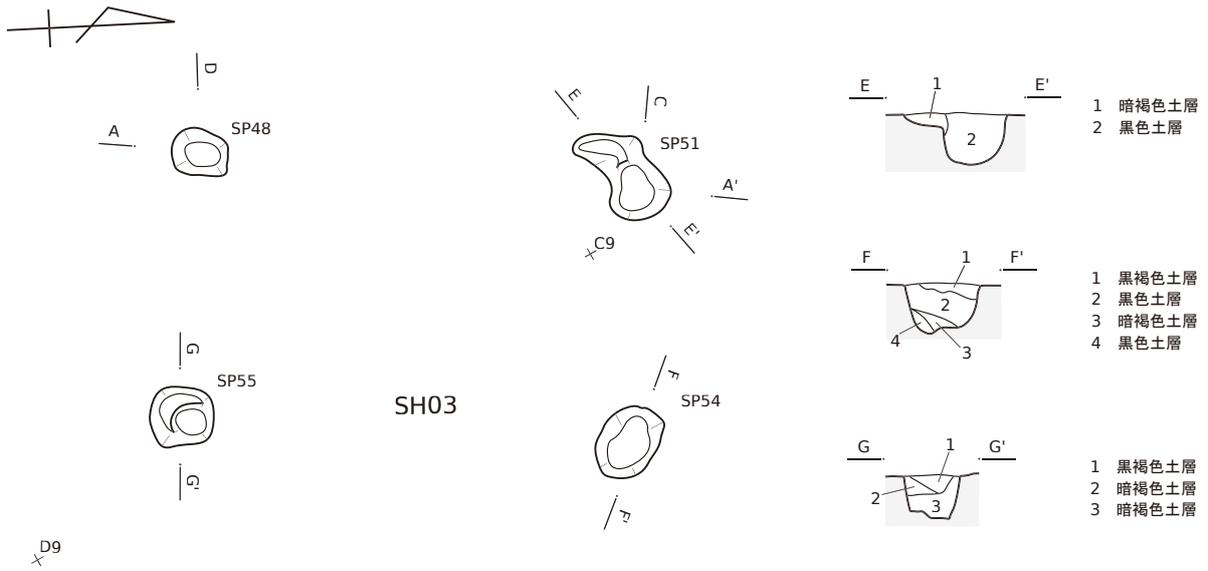
第5図 SB02実測図(1)



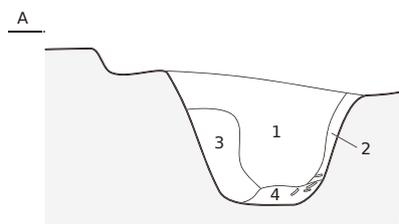
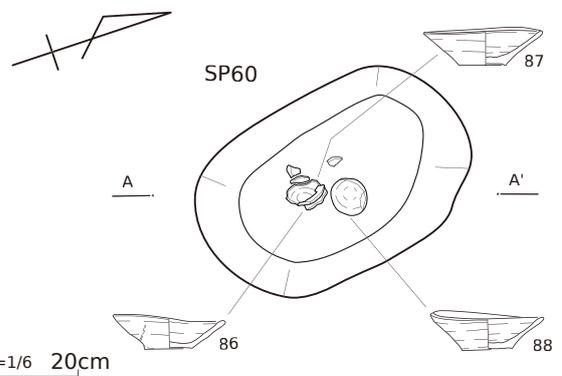
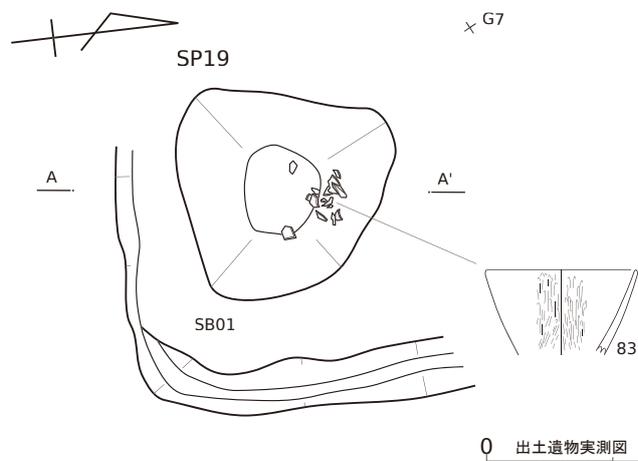
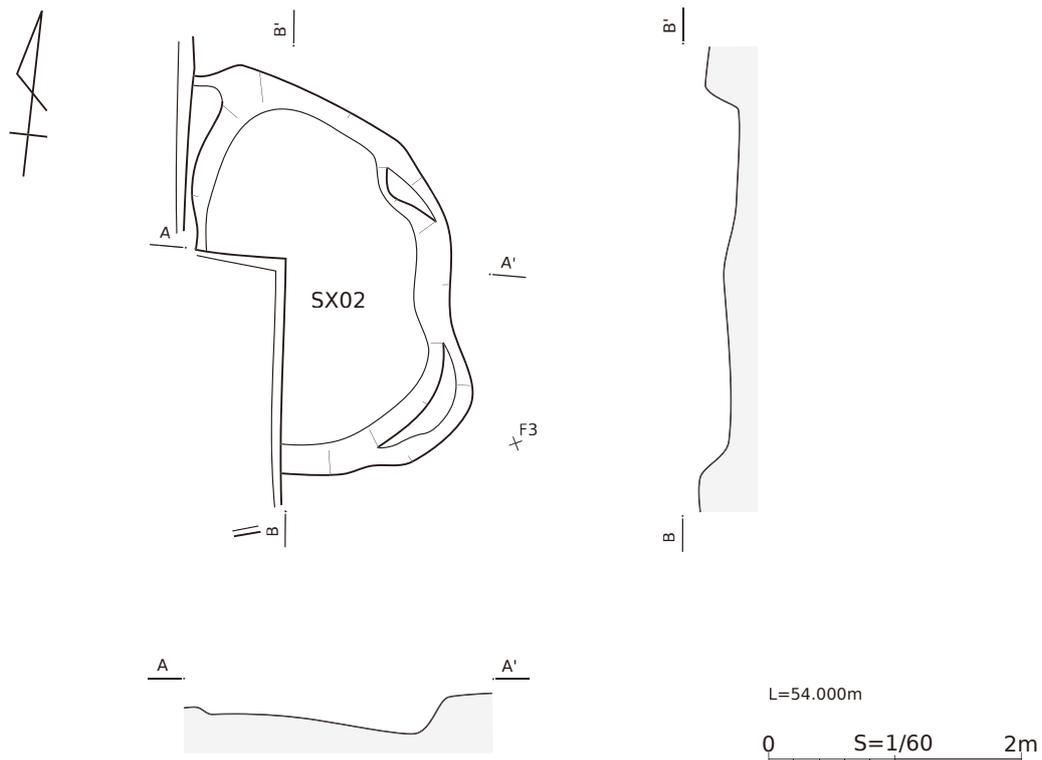
第6図 SB02実測図(2)、SB03・04実測図



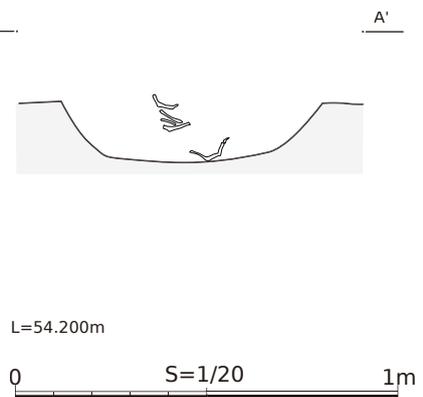
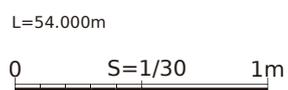
第7图 SH01·SH02实测图



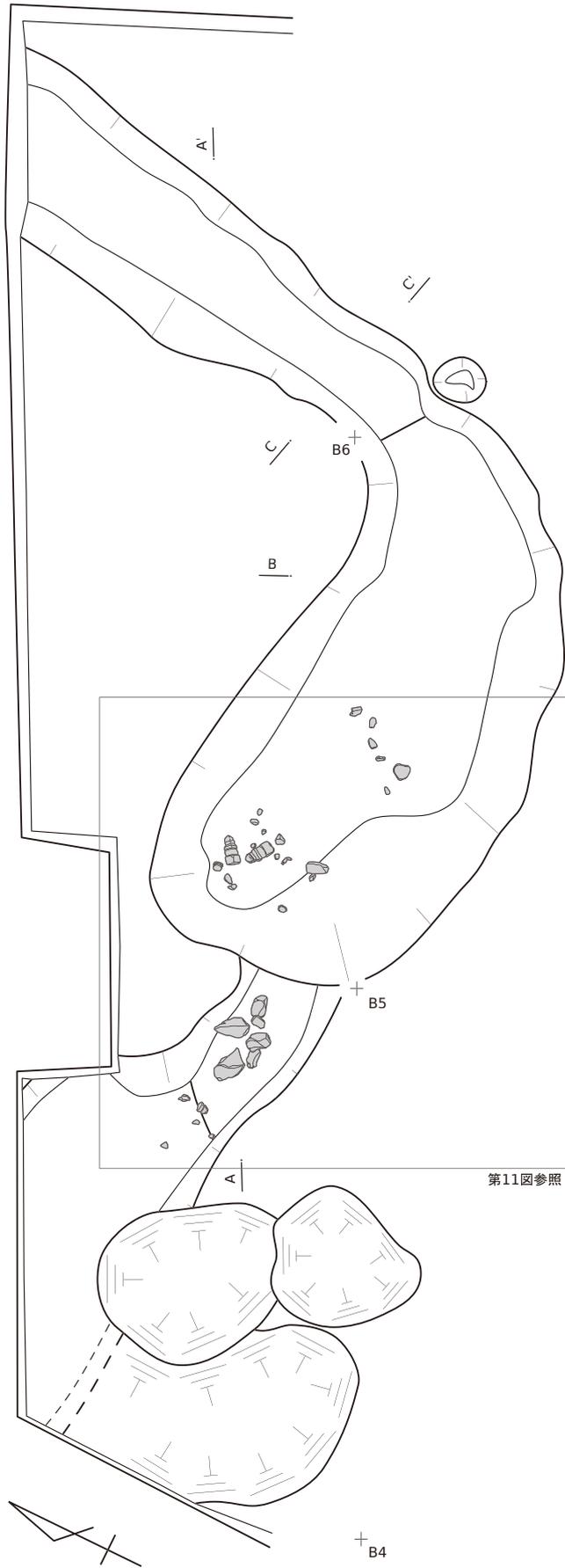
第8図 SH03・SX01実測図



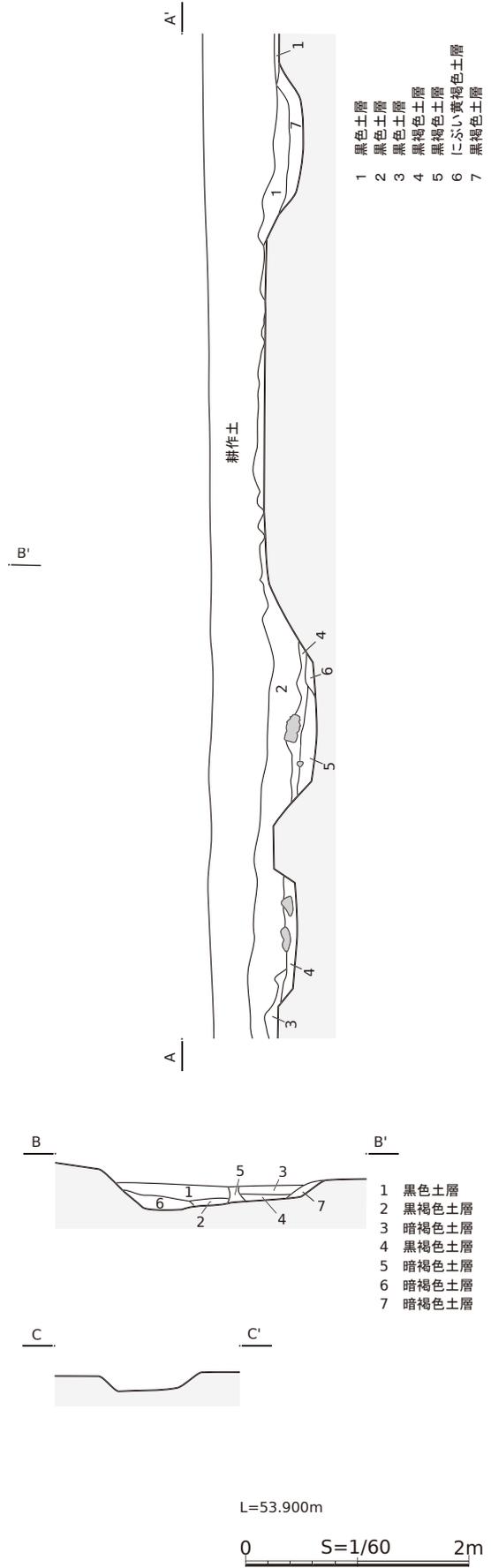
- 1 黒褐色土層
- 2 暗褐色土層
- 3 暗褐色土層
- 4 黄褐色土層



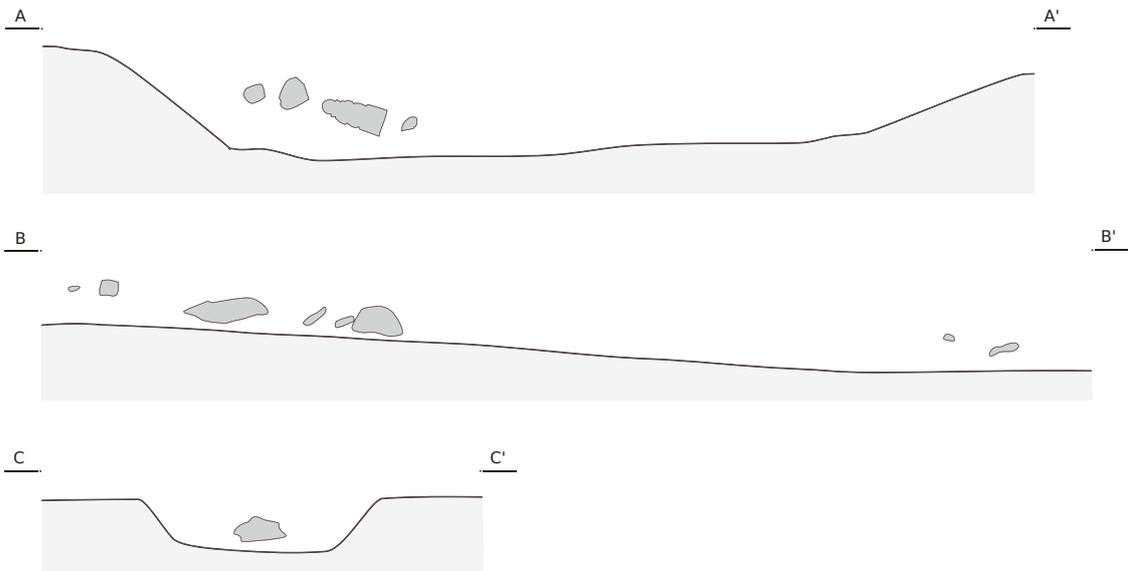
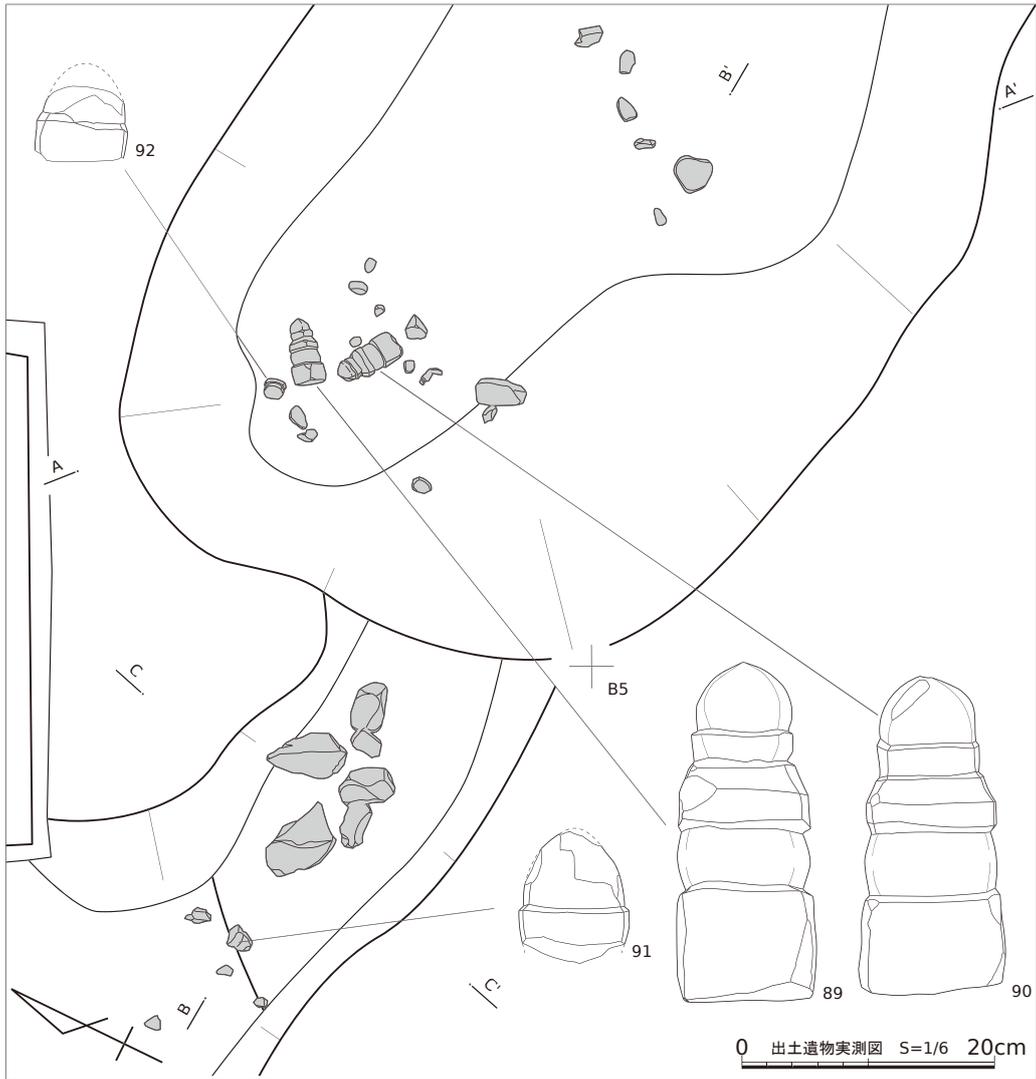
第9図 SX02・SP19・SP60実測図



第11図参照



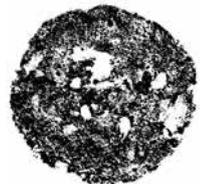
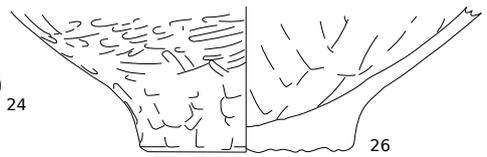
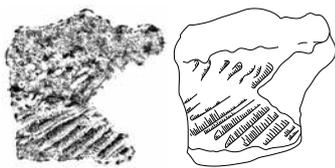
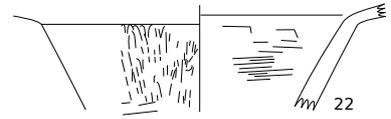
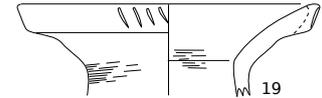
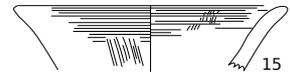
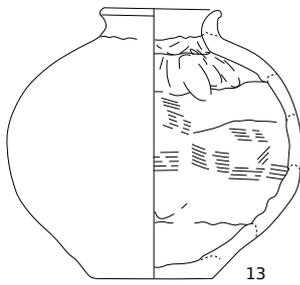
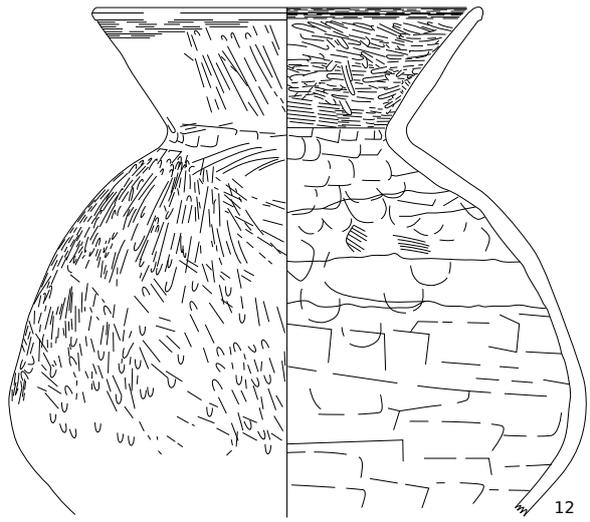
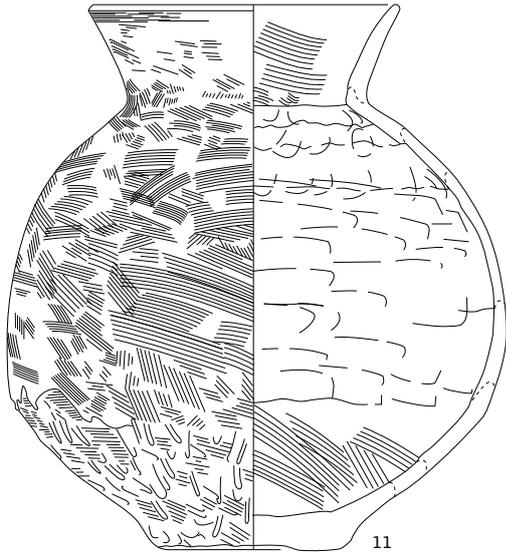
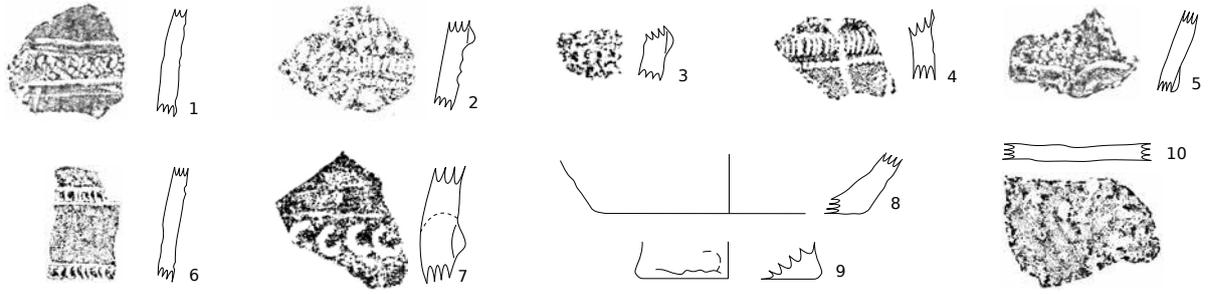
第10図 SD01実測図 (1)



L=54.100

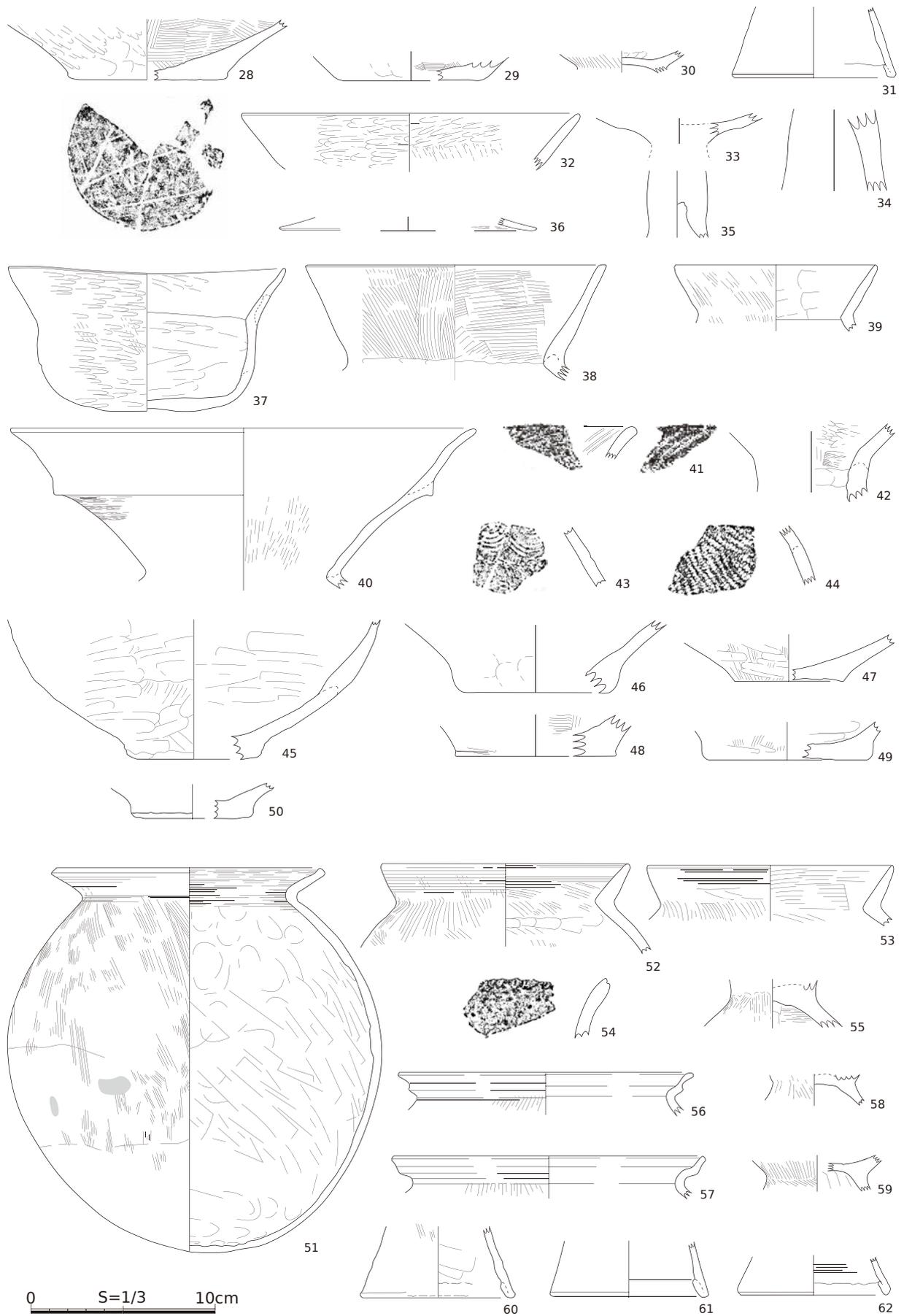
0 S=1/30 1m

第11図 SD01実測図 (2)

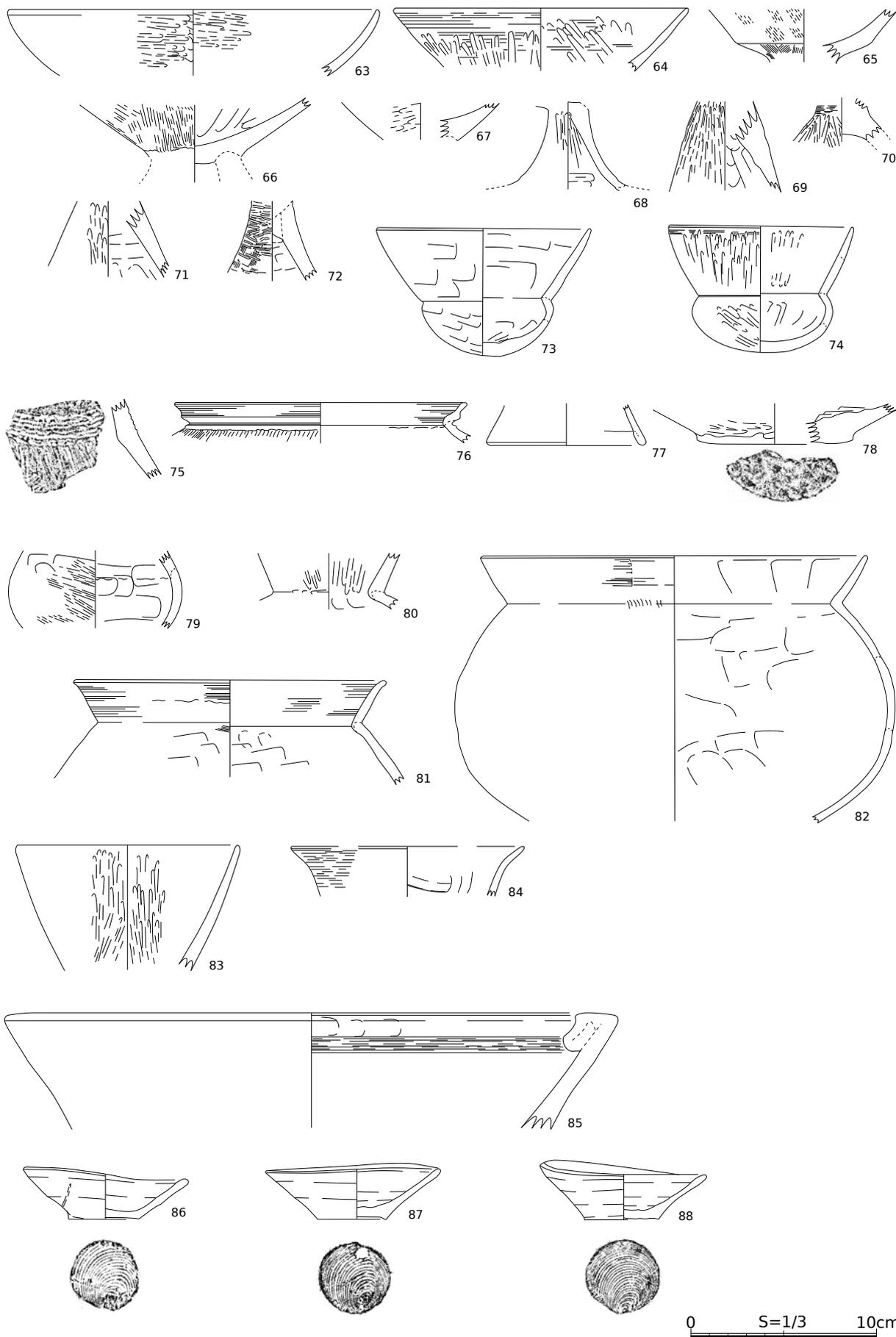


0 S=1/3 10cm

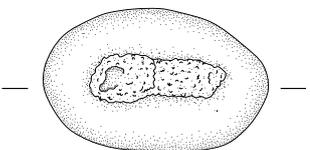
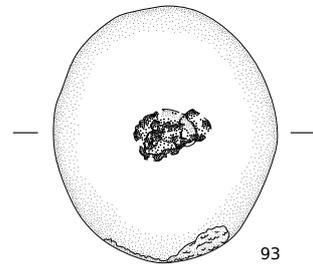
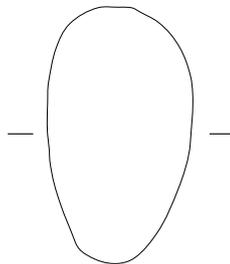
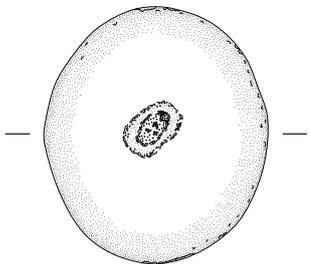
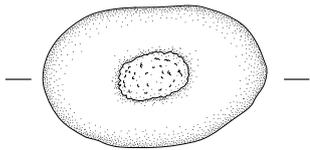
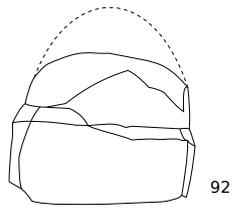
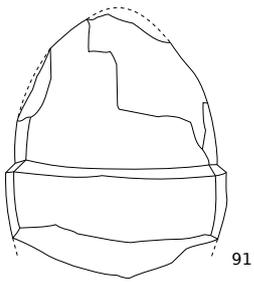
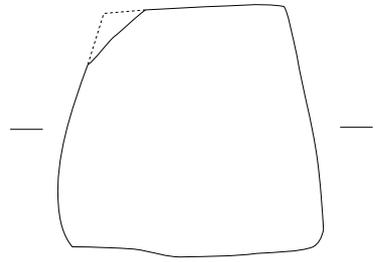
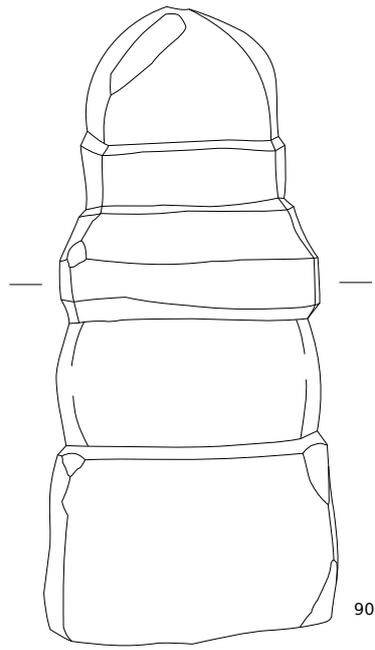
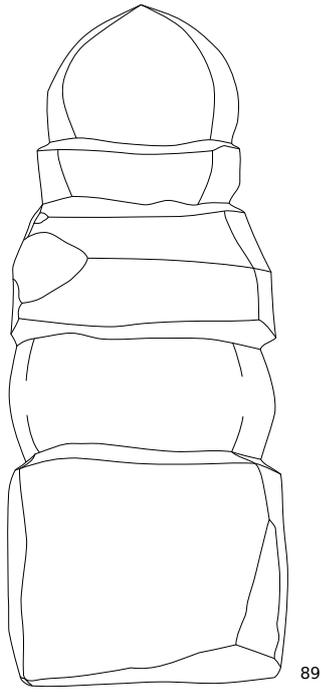
第12図 出土遺物実測図(1)



第13图 出土遺物実測図(2)

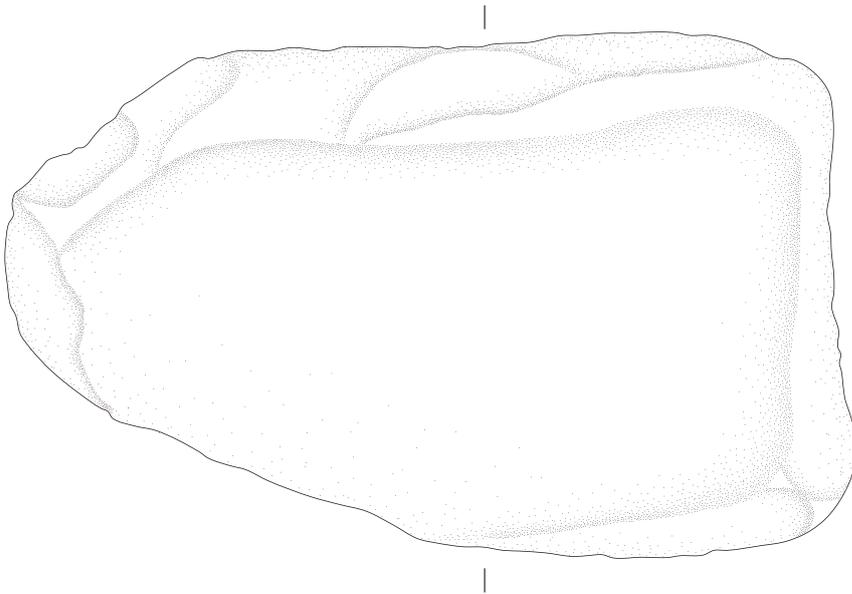
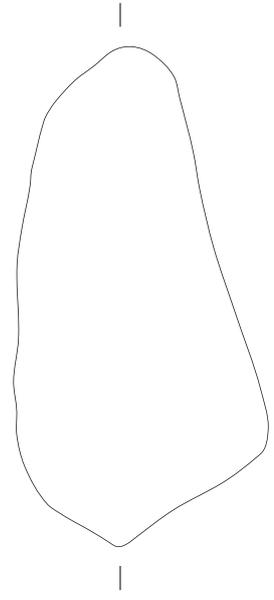
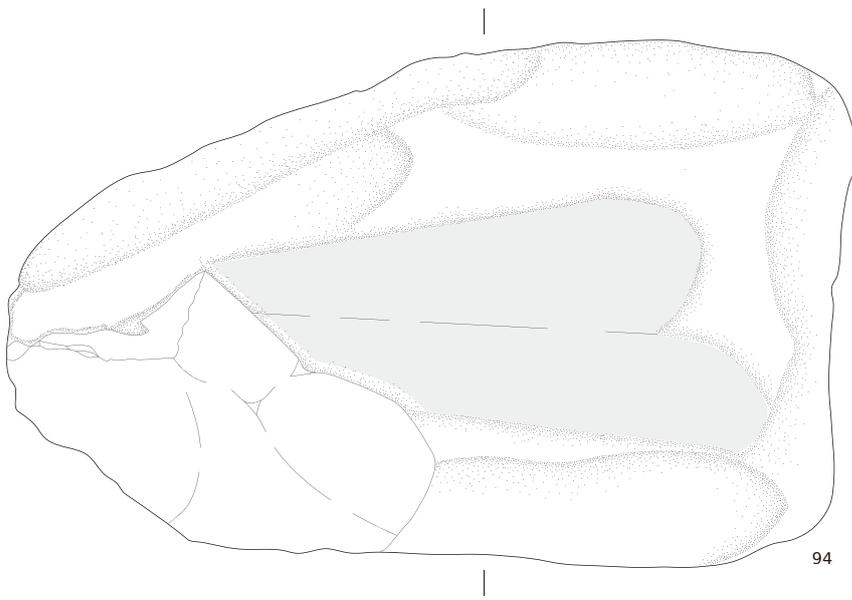


第14図 出土遺物実測図(3)



0 S=1/3 10cm

第15図 出土遺物実測図(4)



0 S=1/3 10cm

第16図 出土遺物実測図(5)



調査区遠景（南から）



調査区遠景（北西から）

カラー図版2



南側調査区全景



北側調査区全景



SB01出土状況（北から）



SB01・SB03完掘状況（北から）

図版2



SB02出土状況（西から）



SB02完掘状況（西から）



SB04完掘状況（西から）



SH01完掘状況（北から）

図版4



SH02完掘状況（北から）



SH03完掘状況（西から）

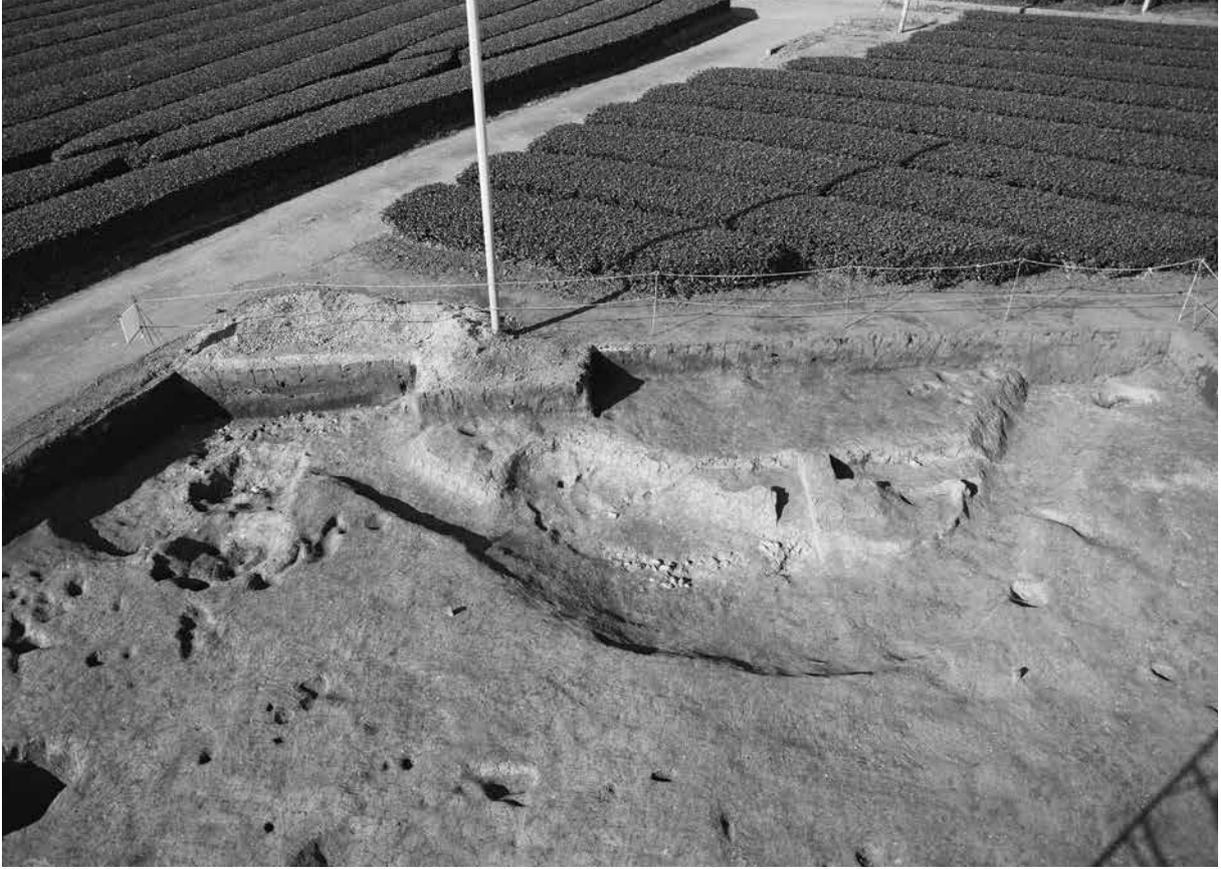


SX01出土状況（西から）



SX02完掘状況（東から）

図版6



SD01完掘状況（南から）



SB01土器出土状況（南から）



SB01土器出土状況（北東から）



SB01焼土検出状況（北から）

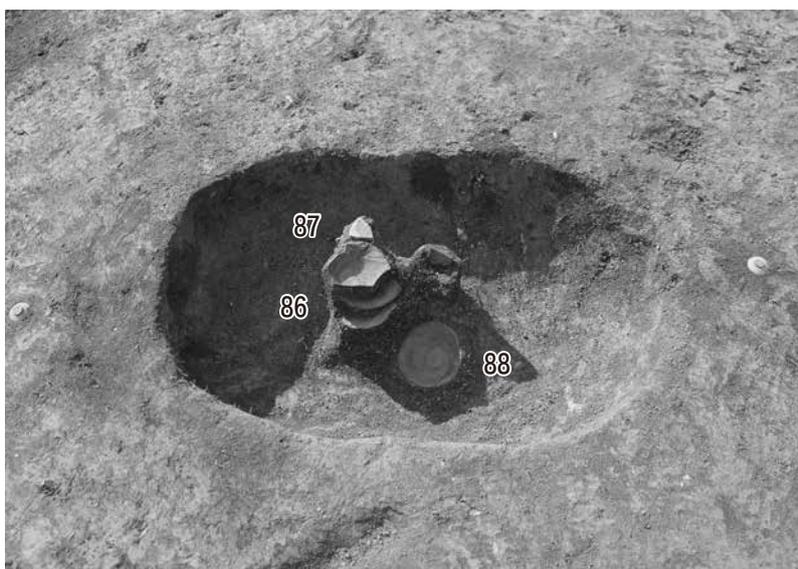


SB02土器出土状況（南から）

図版8



SBO2硬化面検出状況（西から）



SP60カワラケ出土状況（東から）



SD01一石五輪塔出土状況（南から）

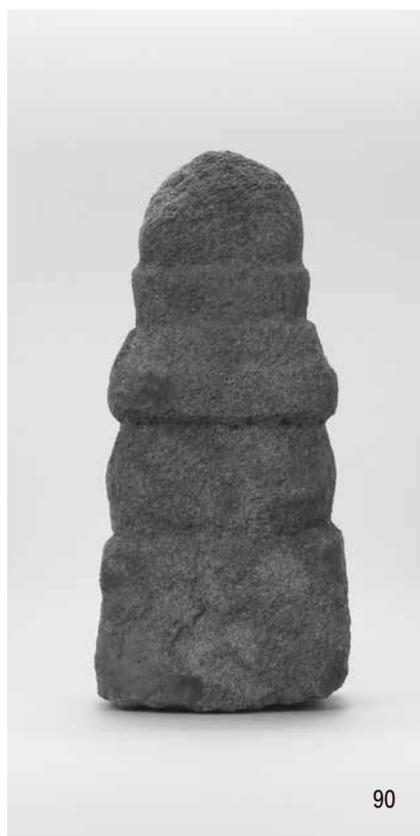
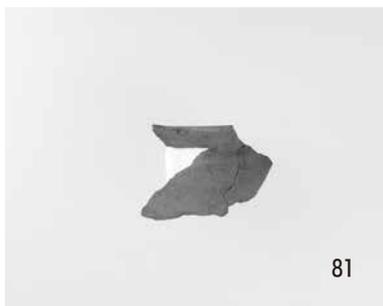


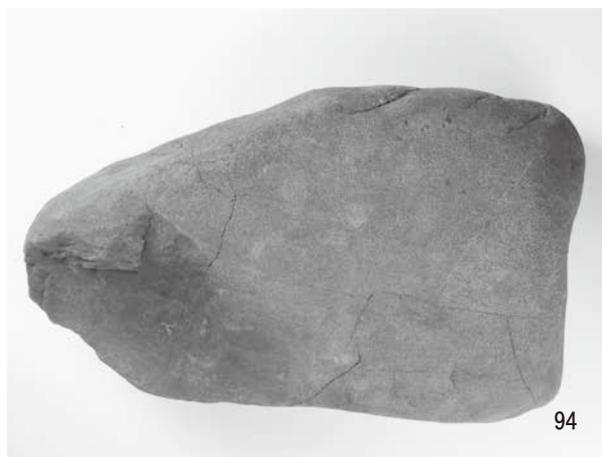
图版10



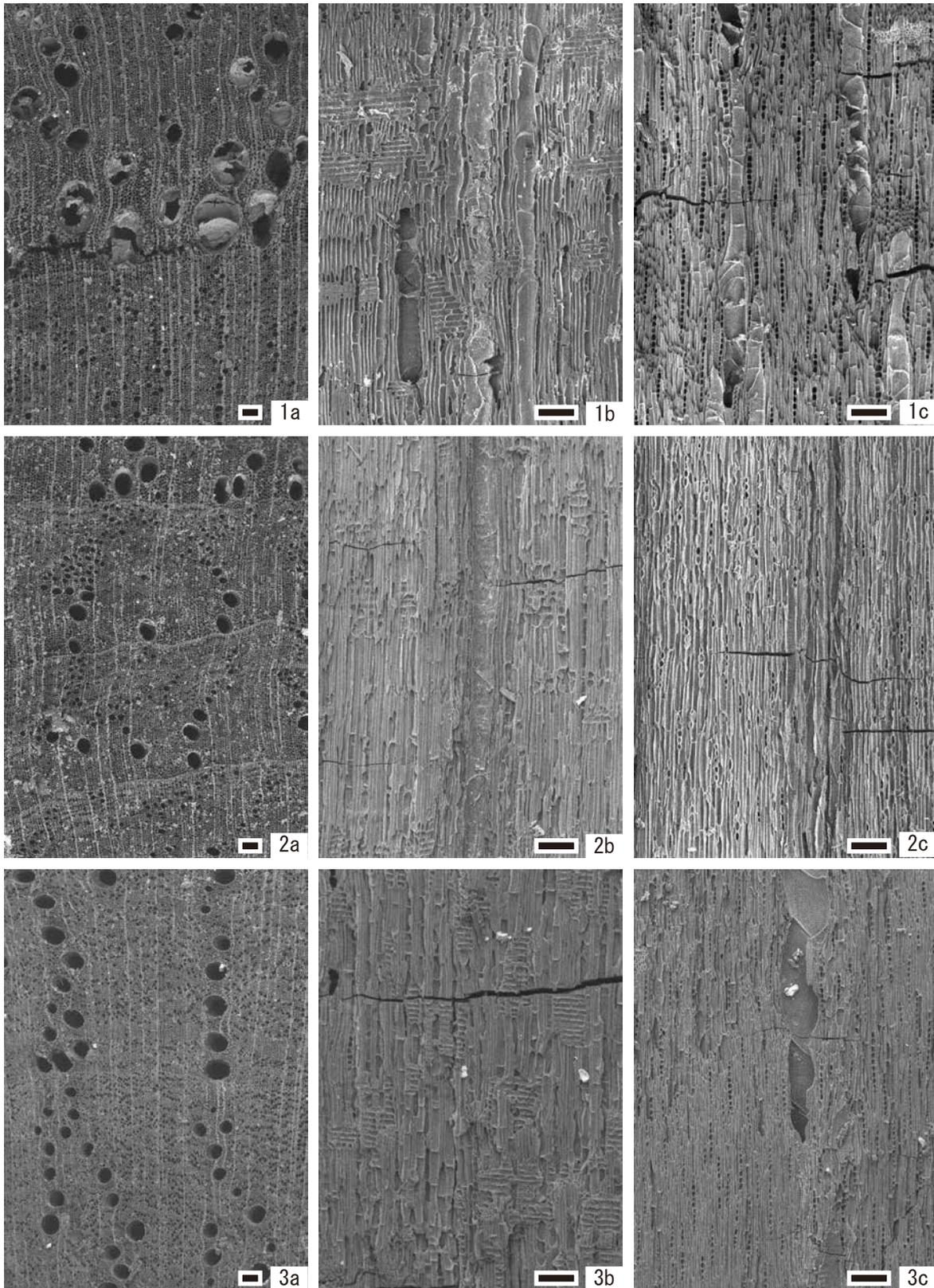


图版12





図版14



1. シイ属(K231(16)72)
2. シイ属(K231(16)74)
3. アカガシ亜属(K231(16)229)

a:木口 b:柁目 c:板目
スケールは100 μ m

報告書抄録

ふりがな	よしおかしたのだんいせきだい16じはっくつちようさほうこくしょ							
書名	吉岡下ノ段遺跡第16次発掘調査報告書							
編著者名	長井郁織 戸塚和美							
編集機関	掛川市文化・スポーツ振興課							
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷1-1-1 TEL0537-21-1158							
発行機関	掛川市							
発行年月日	2021年（令和3年）3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしおかしたのだん 吉岡下ノ段遺跡	しずおかけんかけがわしよしおか 静岡県掛川市吉岡	22213	231	34度 79分 62秒	137度 95分 00秒	2018年(平成30年) 7月13日 ～ 2018年(平成30年) 11月27日	1,167㎡	茶園改植
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
	縄文時代			土器				
	弥生時代			土器				
集落	古墳時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 小穴		土器、石器		段丘中央に位置する集落 布留式土器と大廓式土器 の外来系土器の出土		
墓地	中世	墓		一石五輪塔		周溝を伴う中世墓		
集落・墓地	近世	土坑		カワラケ				

吉岡下ノ段遺跡第16次発掘調査報告書

2021年（令和3年）3月25日発行

編集 掛川市文化・スポーツ振興課
発行 掛川市
〒436-8650
静岡県掛川市長谷1-1-1
TEL 0537-21-1158
印刷・製本 松本印刷株式会社
静岡県袋井市新屋4-5-2
TEL 0538-43-6300

